



目 次

研究科長・医学部長就任のご挨拶	山崎 英俊	2
新入生へのお祝いと激励のメッセージ	榊屋 正浩	3
令和8年度医学部医学科入学者選抜結果について	後藤 英仁	4
令和8年度医学部看護学科入学者選抜結果について	片岡 三佳	5
大学院医学系研究科生命医科学専攻（博士課程）、 医科学専攻（修士課程）の入学試験実施状況について	俵 功	6
大学院医学系研究科看護学専攻の修了・入学状況および近況について	磯和 勅子	7
医学部長・小児科教授退任にあたって	平山 雅浩	8
感染症制御医学・分子遺伝学分野教授退官にあたって ～三重大学は私のふるさと～	野阪 哲哉	10
免疫学教授就任のご挨拶	安間 太郎	15
教授就任のご挨拶	柴田 博史	16
教授就任のご挨拶	堀 美香	18
教授就任のご挨拶	山内 孝	19

トピックス

第80回消化器外科学会総会 優秀演題賞を受賞して	山田 修大	20
A-PHPBA2025 “HPB Fellow or Residency Travel Grant” 及び “Young Investigator Award” を受賞して	山田 修大	21
膵がん撲滅の啓発活動 「パープルリボン ウォーク&セミナー 2025 in 津」を開催して	岸和田昌之	22
第99回日本糖尿病学会中部地方会 若手優秀演題賞セッション 最優秀演題賞を受賞して	岡野 優子	34
第29回日本心不全学会学術集会最優秀賞を受賞して	森脇 啓至	34
第166回東海・第151回北陸合同地方会 2025年度 AHA国際交流助成	宇野 拳太	35
第166回東海・第151回北陸 日本循環器学会合同地方会AHA国際交流助成、 AHA Council on Peripheral Vascular Disease(PVD) Travel Grantを受賞して	小林壮一郎	36
武田科学振興財団 海外研究留学助成採択を受けて	細見 謙登	38
『第39回日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会総会 総会賞』を受賞して	西川 晃平	39
日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会2025 ベストプレゼンテーション賞を受賞して	朝居 祐貴	40
第95回日本感染症学会西日本地方会学術集会・第73回日本化学療法学会 西日本支部総会合同学会 ポスターAward優秀賞を受賞して	森川 祥彦	41

学会だより

第10回西日本医学生学術フォーラムを開催して	八十島左京	42
第296回日本小児科学会東海地方会を主催して	平山 雅浩	51
第76回三重県公衆衛生学会開催のご報告	神谷 元・金井 瑞穂	52

学位記授与式	53
--------	----

研究科長・医学部長就任のご挨拶

医学系研究科長・医学部長 山崎 英俊



2026年4月1日より、医学系研究科長・医学部長を拝命いたしましたので、謹んでご挨拶申し上げます。私は2006年に本学の基礎医学

学生理学第一講座（旧再生

統御医学分野）の教授に着任して以来、生理学・幹細胞発生学の教育研究に従事するとともに、副医学部長や生命支援センター長、動物実験施設長等の職務を通じて、本学の管理運営の一端に携わって参りました。伝統ある本学の新たな歴史を皆様と共に歩めることを、心から光栄に存じます。

本学医学部は1944年開校の三重県立医学専門学校を前身とし、2024年に開校80周年という大きな節目を迎えました。現在は、大学院教育を担う医学系研究科、学部教育を担う医学部（医学科・看護学科）、そして県内唯一の特定機能病院である附属病院が三位一体となり、「確固たる使命感と倫理観をもつ医療人を育成し、豊かな想像力と研究能力を養い、地域および国際社会に貢献する」という目標を掲げ、歩みを続けております。

昨今の国立大学を取り巻く環境は、非常に厳しいものとなっております。文部科学省が進める大学改革や運営費交付金の削減、教員定員数の削減、さらには物価高騰による病院経営への影響など、多くの課題に直面しております。こうした時代において、本学がその役割を全うし続けるためには、地方大学としての「独自性」と「独創性」をより一層確立していく必要があります。三重という豊かなフィールドから得られる知見を、世界に通ずる普遍的な価値へと昇華させること、その唯一無二の独自性を磨き上げ、三重県のみならず国や社

会から真に必要とされる大学としての地位を確立することこそが、私たちの「生き残りを懸けた」挑戦であると考えております。

私は、学長を中心とする大学本部と緊密に連携し、他研究科や国内外の他大学、さらには産業界との垣根を越えた「共創」を支える役割を担っていきたいと考えております。その基盤となるのは、皆様との「相互の尊敬と信頼」です。職種や組織の枠を超え、互いの専門性と人間性を尊重し合い、皆様が輝き、活躍できる場を整備することが、次世代を拓く源になると信じております。

研究科長・医学部長としての私の使命は、1) 優れた医学・看護学教育と入試制度の改革という点で、優れた医学・看護学の教育プログラムを維持・発展させるとともに、時代のニーズに即した入試制度の改革を推進したいと考えます。質および志の高い学生を迎え入れ、科学的思考と倫理観を備え、国際的な視点を持って社会に貢献できる医療人・研究者を育てたいと考えております。2) 卓越した研究の推進と国際共創という観点では、地方大学ならではの独創的な視点を大切に、基礎と臨床が手を取り合える研究環境を整備したいと考えます。多様な価値観が交差する「国際共創」を通じて、先端の医学研究や卓越した研究成果を世界へ発信できるような組織を整備したいと考えております。3) 最先端の医療と地域社会への貢献については、地域医療の最後の砦としての責務を果たし、地域医療の充実と適切な医学部定員の確保に努めて参ります。附属病院における最先端の医療を地域に還元し、自治体や産業界とも連携を深め、三重の地から人々の健康と幸福に寄与する独自性ある価値を共に創造して参りたいと考

えます。

医学部は、高い理念と情熱を持った「人」が集まり、未来を志す場所と考えます。教職員と学生が一丸となり、互いを尊重し、協調し、現在、置かれている難局を乗り越え、次世代に誇れる三重大大学医学部を共に創り上げていきたいと考えております。

これらを実現するためには、教職員、学生の皆様、お一人おひとりのご支援が不可欠です。皆様の多大なるお力添えを、心より、そして強くお願い申し上げます。今後とも、温かいご理解とご支援を賜りますよう、どうかよろしくお願い申し上げます。

新入生へのお祝いと激励のメッセージ

看護学科長 榎 屋 正 浩

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。三重大大学医学部看護学科によろこそ。大学生としての新たな一歩を踏み出す皆さんの門出を、看護学科教員一同、心からお祝い申し上げます。

突然ですが、皆さんは、トーベ・ヤンソンのムーミン物語をご存知ですか？その中に登場する“さすらいの旅人スナフキン”の台詞に「大切なのは、自分がしたいことが何かを、わかってるってことだよ」というのがあります。看護学科に入学したのですから、皆さんは「何になりたいのか」はすでに決まっていると思いますが、大事なのは、その上で「何をやりたいのか」ということです。それをこれからの4年間の大学生活の中で見つけていってほしいと思います。一人で学ぶことも大切ですが、同輩や先輩、また、他学部の学生とのコミュニケーションや一緒に行う活動の中でしっかりと考えてみてください。

三重大大学の基本理念は「地域を見つめ 三重から世界へ 世界から三重へ 未来を拓く地域共創大学 地域に根ざし、世界に誇れる教育・研究に取り組み、人と自然の調和・共生の中で、社会との共創に向けて切磋琢磨する」ことです。そして、これを実現するために教育目標が掲げられています。

三重大大学の教育目標は、「感じる力」「考える力」「コミュニケーション力」「行動する力」を総合した「生きる力」を養い、幅広い教養を身につけるとともに高度な専門知識や技術を有し、国際的な視野を持ち、社会のイノベーションを推進できる人材を育成することです。これからの4年間の大学生活ではこれら4つの力を身につけるように頑張ってください。また、看護学科が掲げる教育理念は、高度で専門的な看護教育を提供し、「倫理観と豊かな人間性」を備え、地域社会への貢献はもとより、国際的な視野に立って活躍できる、「人間的・専門的に高い資質」を持った看護専門職者を育成することです。

皆さんもご存知の通り、地域医療構想の実現や地域包括ケアシステムの推進に向け、医師・看護師・助産師・保健師・薬剤師・栄養士・理学療法士など多職種が連携して適切な保健・医療・福祉を提供することが期待されており、中でも高齢者や複合疾患、認知ケアなど看護職には患者の多様性に対応できる高度な知識や技術が求められています。また、2026年度からのカリキュラム改正では、看護現場のDX推進に伴う情報リテラシーやデジタル機器の活用能力が強化されるとともに「卒業時にどのような能力を身につけているか」

が重視されるアウトカム基盤型教育になります。

看護学科のカリキュラムは、論理的・批判的思考やリサーチマインドを強化し、地域あるいは国際的な視点に立って活躍できるリーダーを育成することを目指した内容となっています。皆さんには、これからの4年間、(1)主体的に判断して行動すること、(2)他者と協働して思考・表現できるコミュニケーション力や科学的思考力といった、生涯に亘り学び続ける際の基本姿勢を養っていただくことが求められます。高校までの教員から学ぶ受動的学習ではなく、常に疑問や課題を見出し、その理由や解決方法を自ら探求する能動的学習を継続して実施する必要があります。グループ学習も多く of 教科で実施されますので、積極的に参加するようにして下さい。皆さんの学びの活動を看護学科の教員一同でしっかりと支援いたします。

皆さんは看護学を学び、看護職という人のいのちと生活に深く関わる専門職を目指すわけですから、知識や技術の修得のみならず、看護専門職者としての適切な判断力・行動力・自己研鑽力など

のプロフェッショナルリズムや医療者としての倫理観も身につけてほしいと思います。また、看護学科卒業後、看護師だけでなく助産師や保健師、さらには教員や研究者として活躍する道が開かれています。今から始まる4年間の看護学科での学びの中で、自らが理想とする看護職を想像しながら、それに近づくために何をすべきかを入学後すぐから考え、日々研鑽してほしいと思います。看護学専攻の大学院も備えていますから、学部での学びをさらに発展させたいと思う方は大学院への進学も考えてみてください。

しかし、大学生活は学業だけではなく。クラブやサークル活動などにも積極的に参加し、多様な経験を通して視野を広げてください。そのすべてが、将来、看護職として人に寄り添う力となります。

人のいのちと生活に真摯に向き合える看護職へと成長されることを願っています。皆さんのこれからの4年間が実り多いものとなることを、心より期待しています。

令和8年度医学部医学科入学者選抜結果について

医学科入学試験委員長 後藤英仁

令和8年度入試より入試委員長を拝命いたしました後藤英仁と申します。今後ともよろしく願いたします。

まず、医学科の入試定員について簡単に説明させていただきます。三重大学医学部医学科に現在認められている恒久定員は105名（一般枠が90名、地域枠Aが15名）、医師の地域偏在を解消するために国から認められた臨時定員枠として20名（地域枠Aが10名程度、地域枠Bが5名程度、三重県地域医療枠が5名程度）の計125名（地域枠全体

で35名程度）が令和7年度まで認められていました。後者の臨時定員枠は国に毎年申請している定員枠で、令和8年度も臨時定員枠として例年通りの20名が認められ、令和7年度までと同様に令和8年度も125名での募集となりました。各地域枠の違いを大まかに述べさせていただくと、地域枠Aは三重県出身者からの選抜枠、地域枠Bは三重県内の指定地域の市町村および病院から推薦を受けた者からの選抜枠（診療科指定あり）、三重県地域医療枠が全国からの選抜枠です。

つまり、令和8年度入試募集人員は推薦40名程度（一般枠が10名程度、地域枠Aが25名程度、地域枠がB 5名程度）、前期日程75名程度（一般枠が70名程度、三重県地域医療枠が5名程度）、後期日程10名程度（一般枠のみ）の計125名です。

学校推薦型選抜では大学入学共通テスト（1月17,18日）の成績により一次選抜を行い、2月8,9日に小論文、面接を行いました。その結果、39名（一般枠が10名、地域枠Aが24名、地域枠Bが5名）が合格しました。

前期日程試験は、2月25日に数学、理科、外国語の試験が、26日には個人面接が行われ、76名（一般枠が70名、三重県地域医療枠が6名）が合格しました。今年度は推薦入試での地域枠Aが1名少なかった関係で三重県地域医療枠として6名を合格といたしました。

後期日程試験は、3月12日に小論文と個人面接が行われ、10名が合格しました。最終的に125名が入学手続きをしました。

来年度以降についての状況について少し述べさせていただきます。厚生労働省が令和2年に作

成した資料では、（週55時間に医師の労働、つまり、おおよそ年間720時間の時間外・休日労働に制限したケースでも）全国平均で（本年度、つまり、2026年の医学部入学者が医師になると想定される）2032年ごろには需給バランスが拮抗し、その後、医師過剰時代を迎えると試算されています。現在、三重県はまだ医師少数県に分類されており、現場のご意見としてはまだまだ医師が不足しているというのが実感と存じます。しかし、現在認められている臨時定員枠が令和9年度以降も同様に20名で認められるかについては余談を許さない状況にあると考えております。三重県唯一の医師養成機関として、今後、どのような大学にしていく（入試定員をどのように割り振っていく）かの議論が必要になると考えていますが、その際には、皆様の積極的かつ建設的なご意見を賜れば、幸甚に存じます。

最後に、この場を借りて、入試業務に携わっていただいた事務職員ならびに教員の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和8年度医学部看護学科入学者選抜結果について

看護学科入学試験委員長 片岡三佳

医学部看護学科の入学者選抜には、一般選抜、学校推薦型選抜、社会人特別選抜があります。

募集人数の内訳は、一般選抜の前期日程52名、後期日程5名、学校推薦型選抜は20名（地域枠13名程度を含む）、社会人特別選抜が3名の合計80名です。学校推薦型選抜では、三重県の優秀な人材が、卒業後も県内で看護職として働いてくれることを目的とし、地域枠での募集も拡げてきました。

看護学科の入試は8月の社会人特別選抜から始まります。社会人特別選抜とは、5年以上の社会

人経験があり、本学科に入学を希望する者を対象としています。TOEICスコア500点以上を出願要件とし、試験科目は小論文および面接となりますが、今年度は出願者がいませんでした。

学校推薦型選抜については、第1次選考を本年2月4日に実施、大学入学共通テストの成績に基づき30名を選抜し、第2次選考は2月9日に面接試験を行いました。その結果25名が合格し、全員が入学手続きを行いました。地域枠の方は18名、地域枠以外が7名となりました。

一般選抜の前期日程は、2月25日に数学または国語、および外国語、2月26日に面接の試験が行われました。令和3年度から個別学力検査の教科を増やし、これまでの外国語に加えて、数学または国語から1教科を課すとともに、一昨年度より面接の得点化が導入されました。今年度の志願者は93名（昨年度135名）、実際に受験した者は69名（昨年110名）で、その結果59名が合格し、全員が入学手続きを行いました。後期日程は3月12日に実施し、小論文と面接試験が行われました。今年度の志願者は68名（昨年度106名）で、実際に受験した者は7名（昨年度22名）で、5名が合格し、3名が入学手続きを行いました。

最終的に、学校推薦型選抜25名、前期日程59名、

後期日程3名の合計87名が入学手続きを完了しました。内訳は、県内出身者50名（57.5%）、県外出身者37名（42.5%）で、県内出身者の割合が年々、上昇しています。

今年度も入学試験が滞りなく実施できましたのは、ご協力をいただきました事務職員ならびに教員のみなさまのおかげです。ありがとうございました。

令和9年度入試より、これまで行ってきた一般選抜後期日程および社会人特別選抜での募集が停止となり、総合型選抜が行われることとなります。少子化が益々進行する中ですが、優秀な人材の確保に向けて、努力していきます。ひきつづき、お力添えくださいますよう、今後ともよろしくお願い申し上げます。

大学院医学系研究科生命医科学専攻（博士課程）、 医科学専攻（修士課程）の入学試験実施状況について

大学院委員会委員長 俵 功

令和7年度募集の大学院入試は、医科学専攻（修士課程）、生命医科学専攻（博士課程）ともに、令和7年8月と令和8年1月の2回行いました。

生命医科学専攻（博士課程）入試の合格者は51名で、8月入試で17名、1月入試で30名、国費優先配置による留学生が4名合格しました。令和7年10月入学者は14名でした。

上記合格者51名中、留学生を除く内訳は、社会人特別選抜（社会人向け）入学者が47名（うち医師は40名）、社会人特別選抜以外が0名でした。47名中の医師の割合は85%（40人）となっており、三重大学医学部医学科卒は30名、本学修士課程からの進学者は1名でした。以上が令和7年度の入試報告となります。

次に大学院の現状について、ご報告いたします。令和7年度は、前年度と比べ入学者がやや増加しておりますが、新専門医制度における専門医資格

取得の過程では研究活動との並行は難しく、受験年齢層の研究に対する考え方も変化してきています。このような制度や志向性の変化の中でも、医学・医療の進歩には研究活動の継続と、その成果の社会への還元は欠かせませんので、先生方には引き続き大学院での研究活動を若い方々にご推奨いただきますようお願い申し上げます。

定員12名の医科学専攻（修士課程）については、令和7年度10月入学および令和8年度4月入学の学生を含め、現在、医科学専攻修士課程1年生は12名となっておりますが、大学院における定員充足率の課題は、依然として喫緊の課題として残っております。この課題を解決すべく、引き続き病院等でメディカルスタッフとして仕事をしている方々、行政の現場で仕事をされている方々に入学を推奨するとともに、医学系研究科以外の他研究科との連携を考えております。また大学院委員会

では入学者を増やすべく、広報活動に力を入れており、ウェブサイトの充実等による大学院の周知とともに、近年は毎年6月、11月に修士・博士の入試説明会を開催しています。

社会人が仕事を続けながら研究する社会人大学院制度は、文部科学省が推奨しているところで、本学でも社会人特別制度を設け社会人を積極的に受け入れるとともに、時間的、経済的支援制度を設けています。時間的な支援制度としては、修士課程に長期履修制度があり、仕事を続けながら教育を受け研究活動を行う大学院生を支援しています。経済的支援制度としては、令和3年度から授業料の一部を奨学金として支援する制度を継続しており、奨学金の返還免除制度も修士課程に2枠、博士課程に1枠ありますので、利用をご検討ください。

医学系研究科には他にも特色があり、いくつか紹介します。令和7年度には、新たに国費外国人

留学生の優先配置を行う特別プログラムが文部科学省に採択されスタートしており、意欲ある留学生の本学での活躍が期待されます。令和5年度には、「次世代のがんプロフェッショナル養成プラン」が採択され、これまでの事業と同様にかん医療における多様なニーズに対応できる人材の育成が期待されます。また、医学系研究科では新しい専攻（修士課程）の設置計画もあり、新たな教育研究領域の発展と、高度な専門性と実践力を備えた人材の育成の場となることが期待されています。

以上の様々な取り組みによって医学系研究科が培ってきた知識と経験を活かした教育・研究ができることは、本学の強みであります。大学院修士・博士課程は、時代とともに学生および社会からのニーズが変わって参りますが、今後も大学院運営への皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

大学院医学系研究科看護学専攻の

修了・入学状況および近況について

看護学専攻大学院委員会委員長 磯 和 勅 子

【大学院生の修了状況】

看護学専攻では、博士前期課程を9名が修了しました。内訳としては、9月に看護教育学2名、そして3月に実践基礎看護学1名、看護教育学1名、地域看護学1名、がん看護学1名、小児看護学1名、老年看護学2名でした。また、博士後期課程を1名が修了しました。内訳としては、3月に成熟期看護学1名でした。

博士前期課程、博士後期課程を修了される皆様、誠におめでとうございました。研究と臨床の両立という困難な道のりを、強い意志と情熱をもって乗り越えてこられたことに、心から敬意を表します。博士前期課程修了の皆様は、専門的知識と研

究手法を習得され、臨床における課題解決能力を磨かれました。その力を現場で存分に発揮され、看護実践の質向上にご貢献ください。

博士後期課程修了の皆様は、看護学における新たな知見を見出し、学術的基盤を築かれました。次世代の看護教育者・研究者として、また実践の場でのリーダーとして、看護学の発展に寄与されることを期待しています。

皆様の今後益々のご活躍を心よりお祈りいたします。

【大学院生の入学状況】

2026年度看護学専攻では、博士前期課程に8名

(定員11名)の新入生を迎えることができました。入学生の内訳は、基礎看護学2名、精神看護学2名、地域看護学1名、成人看護学1名、がん看護学1名、小児看護学1名でした。また、博士後期課程には6名(定員3名)が入学され、その内訳は、地域看護学1名、がん看護学4名、老年看護学1名でした。

新入生の皆様は、それぞれの分野での豊富な臨床経験を持ち、さらなる専門性の向上を目指して大学院での学びを決意されました。大学院での研究活動が、日々の実践と両立しながらの挑戦となる方もいらっしゃると思いますが、その過程で得られる新たな視点や知識は、必ずや看護の質の向上に貢献するものと確信しております。

教員一同、皆様の学びと研究が実り多きものとなるよう、全力でサポートして参ります。

【看護学専攻の近況】

博士後期課程は10年目を迎え、2024年度の5名に引き続き、2025年度は1名が博士(看護学)の学位を取得することが出来ました。

2022年度から博士前期課程に在宅看護学が開設され、2024年度には小児看護学および精神看護学にCNSコースが新設されました。また、2025年度からは、質の高い教育・研究体制の整備を目指し、

博士前期課程の構成が基盤看護学講座および生涯発達看護学講座の2大講座制に移行しました。今後、博士後期課程も博士前期課程と同様の構成に移行予定です。

令和7年度入試より、本学看護学科卒業後、ストレートでの入学志望者に対応した新しい選抜制度が開始されました。看護学の大学院は、臨床経験を積んでからと考えがちですが、近年では、ストレート進学者も増えてきており、専門的な知識や研究力を養うだけでなく、新たな人脈や職業の選択肢を広げることもつながりますので、学部学生の皆さんには、卒業後の進路選択の一つとして検討していただきたいと思っています。

大学院生の多くは、医療現場で働く看護職であり、仕事と学業を両立しながら研究に取り組んでおられますが、さらに教育・研究支援の環境を整え、2026年度も引き続き多くの修了生を輩出できるよう、大学院生とともに教員も頑張っていこうと考えています。

これからも、看護学の実践を通して医療・保健の質向上に貢献できる人(博士前期課程)、そして独自性豊かな看護学研究成果を生み出すことのできる人(博士後期課程)を育成していきたいと考えていますので、志気の高い看護職が大学院へ進学してくれることを願っています。

医学部長・小児科教授退任にあたって

医学系研究科長・医学部長・小児科学教授 平山雅浩



三重大学医学部の教育・研究・医療に日頃よりご理解とご支援をいただき、感謝申し上げます。このたび二年間務めました医学系研究科長・医学部長の任を

2026年3月をもって終えるとともに、2016年より務めてまいりました小児科教授も退任することとなりました。節目にあたり、これまでお世話になりました皆様への感謝の思いを込めてご挨拶申し上げます。

1986年に三重大学医学部を卒業して以来、小児

科医として三重大大学と歩みをともにしてきました。教育・研究・医療に携わる日々は、多くの恩師や同僚、後進に支えられながら、私自身も育てていただいた年月であったと感じております。小児科教授としての十年間は、子どもたちの命と未来を守るという志のもと、若い医師や学生が誇りと希望をもって成長できる環境づくりを心がけてきました。同時に、次代の小児医療を担う人材を育てることこそが教室の重要な使命であると考え、教育体制の充実と後進の育成に力を注ぎました。そしてその経験を礎に、三重大大学医学部をさらに前へ進めたいとの思いから、医学部長という立場で医学部の歩みに関わることとなりました。就任に際しては、「オール医学部で次世代につながる明るい未来をめざして」を所信に掲げ、教育・研究・医療・社会貢献を一体として進める組織づくりを中心に据えてきました。

教育面では、医学教育分野別認証評価を見据えた教育改革を進めました。6年間を通したカリキュラム全体の在り方についてカリキュラム委員会を中心に議論を深め、段階的な改編を進めてきました。その具体化の一つとして、臨床実習72週化を2026年度から実施する体制を整えました。研究室研修を一年次へ前倒しし、学生が早期から研究に触れられる環境も整いました。水平・垂直統合型教育についても検討を続け、基礎科目に臨床の視点を取り入れるなどの取り組みが始まっています。こうした改革を通して、国際基準に即した教育体制が着実に形になりつつあります。また、これまでの教育の成果として、2025年実施の医師国家試験では新卒者100%合格、看護師国家試験も100%合格という結果が得られました。

医療の面では、三重大大学医学部は三重県と緊密な協力関係のもと歩んできました。医学科入学定員125名のうち35名が地域枠学生であり、地域医療を担う人材の育成は本学の大切な使命の一つです。地域枠医師の地域貢献率が課題として指摘さ

れる中、県と協議を重ね、キャリア形成支援や配置の在り方の見直しなど具体的な方策を進めております。あわせて、医学部内の医学・看護学教育センターの体制を見直し、地域医療の充実と学生教育を結びつける仕組みづくりにも取り組んできました。地域と大学が同じ方向を見据えながら、実践と教育が循環する体制の構築を目指しています。

研究面では、大学全体としてトップ10ジャーナルへの論文発表数の増加や大型研究費の獲得を目標に掲げる中、医学部が率先して研究を牽引していくことの重要性を強く意識してきました。研究フェスティバルの開催や研究科ヒアリングを通じて各講座の取り組みを共有し、講座間の連携と異分野融合の促進を図ってきました。若手研究者の育成や外部資金獲得の支援体制の整備にも取り組み、研究基盤の強化を進めています。令和9年度開始予定の医工連携修士教育「デジタルヘルス専攻」もその一環であり、医学と工学の連携による新たな研究展開を目指しています。

組織運営の面では、この二年間で臨床講座に4名、基礎講座に2名の教授が着任しました（うち1名は将来の組織の多様性も見据えた女性限定公募による選考でした）。大学院生の減少や定数削減の影響もあり、とりわけ基礎研究を支える人的基盤の揺らぎが懸念される中、基礎系講座の在り方は重要なテーマとなっています。腫瘍病理学の選考をはじめ、修復再生病理学、医動物・感染医学、感染制御医学・分子遺伝学の今後の在り方について検討が進められており、研究力の維持・向上にとどまらず、本学ならではの特色ある研究、オンリーワン研究をいかに育てていくかが問われています。

歴史を振り返れば、昨年度は三重大大学医学部開学80周年という大きな節目の年でもありました。1944年の創設以来、先端医学研究と地域医療の拠点として積み重ねてきた歩みをあらためて振り返

る機会となりました。附属病院をはじめ、多くの先人の努力の積み重ねの上に現在の医学部があることを実感するとともに、次の時代へ何を受け継ぎ、何を築いていくのかをあらためて考える節目でもありました。

2025年8月より三重県のご支援のもと「三重県移行期医療学講座」教授として県内の移行期医療体制の構築に取り組み、「小児がん先進医療学講座」教授としての活動も続けております。役割は

変わりますが、これまで培ってきた経験を活かしながら、子どもたちとその家族を支える医療に引き続き携わってまいります。医学部長としての任は一区切りとなりますが、三重大学医学部の一員として今後も本学の発展に力を尽くしていきたいと思っております。

三重大学医学部のさらなる発展と、皆様のご活躍を心よりお祈り申し上げ、退任のご挨拶とさせていただきます。

感染症制御医学・分子遺伝学分野教授退官にあたって ～三重大学は私のふるさと～

感染症制御医学・分子遺伝学 野 阪 哲 哉 (S60)



2026年3月31日の退官にあたって母校三重大学への思いを述べさせていただきます。

人生には重大な選択を迫られる局面が何度か訪れます。本学を受験したことは、研究者人生の中で3本の指に入る良い選択だったと思います。共通テスト元年と言われた1979年の初頭、間もなく18歳を迎える青年は迷える子羊でした。最後まで何処に願書を出すか、決まらずにいました。漠然と理工系かな、と考えていましたが、自分が何をしたいのか、明確なビジョンがなかったのです。田舎で美しい星でも眺めながらの、北杜夫のような二足の草鞋生活への仄かな憧れもありました。結果、赤本の中の「白砂青松の町屋海岸」というフレーズがいたく気に入って、小学校の修学旅行以来の三重県に足を踏み入れることになりました。しかし、個別試験の前日、眼前に颯爽とそびえ立つ十字型の附属病院の威容を目の当たりにした瞬間、ここで医学を学びたい!という強い思いに駆られました。思いが通じたのか、幸運の女神に微笑まれ、本学

で6年間学ぶことになりました。私たちの学年は学士さんが多い一方、女子は100名中3名のみでした。関東地方の出身者も多く、ユニークな学年でした。当時は人生の大半をその後、津市で過ごすことになるとは知る由もありませんでした。

私は臨床実習が始まった頃からなぜかスイッチが入り、医学が面白いと感じました。もともと自然科学が好きだったこともあり、医学という学問を究めたいという傲慢な考えが若者の脳裏をよぎりました。「分子生物学の夜明け」、「二重らせん」、「レトロウイルスと私」等を読んでいるうちに、これからの医学は分子生物学の時代に突入する、と考えました。がん遺伝子の研究をしたいと考え、卒後臨床研修をせずに国試の前に京都大学の大学院を受験することにしました。京大医学部出身者でも落ちる試験でしたので、試験勉強も兼ねて臨床実習のレポートを英語やドイツ語で提出するなどして準備しました。無事、合格し、当時米国NIHから帰国し、新たに日本で研究を始められていたウイルス研の畑中正一教授の研究室に進学しました。国試が終わってすぐの1985年4月のことでした。しかし、畑中研進学後3ヶ月経たず

して、研修医を経験しなかったことを大いに後悔しました。大学院生の大半がnon MDの畑中研では研究テーマは自分で考える慣わしでしたが、研究経験の全くない若者に優れたテーマは簡単には思い浮かばず、色々な意味で研修医を経験しなかったことを悔やみました。中途半端な気持ちでは第一線の研究はできないので、ここは大胆な決断が必要だと考えました。京大で臨床研修させていただく方法もあったとは思いますが、私は一から出直した方が良くと考えました。畑中先生に無理を言って7月半ばから母校に戻り、三重大大学の第二内科の白川茂教授の下で国内留学という名目で卒後臨床研修をさせていただきました。具体的な人生設計もなく、何かすごい研究をしたい、と意気込んで他大学の大学院に進学し、数か月で母校に逆戻りという、何とも不格好な彷徨でしたが、その感覚は第二内科勤務初日で吹き飛びました。たまたまその年の同科の初期研修医がゼロだったことも幸いしたのか、実に温かい歓迎を受け、地獄？から天国にきたようなホーム感がありました。この母校へのUターンは研究者人生で二つ目の、3本の指に入る英断でした。1年間限定の短い研修でしたが、毎日が楽しくて仕方がなく、寝る間も惜しんで研修させていただきました。やはり今後研究をするにしても、実際に患者さんの主治医になって一緒に病気と闘う経験は必須であると思いました。患者さんを診察させていただけることは当たり前ではなく、医学部を卒業したからこそ可能なのであり、医師として働けることがどれだけ恵まれたことか、実感できた完全燃焼の1年でした。第一内科と外の病院への2ヵ月ずつのローテーションも経験させていただき、大学院2年の8月から畑中研に戻り、本格的に研究を開始しました。今回はしっかり地に足がついた感覚でした。

当時、畑中研のメインテーマはHTLV-I研究でしたが、それ以外にも幾多の研究が自由闊達に展開されていました。私はATLに限らず、白血病

の研究に強い興味を持ちました。第二内科で白血病の壮絶な臨床を経験した後の自然な流れだったと思います。ちょうど、三重大の白川研の大学院生の三輪啓志先生が国内留学で畑中研に研究に来ておられ、本庶佑教授とも共同研究をされていました。更に白川研のスタッフとして三重大で活躍されていた天才肌の北堅吉先生がその共同研究のブレインになっておられ、なんとも魅力的な最先端の白血病研究が行われていました。畑中研に復帰後、そのプロジェクトに参加させていただけたのは本当にラッキーでした。三輪先生に師事し、毎週、北先生（ご出身の京大第一内科のリンパ腫研究室に毎週顔を出しておられました）と三人での刺激的な研究ミーティングがありました。その後はきまって北先生に京大病院前の割烹に連れて行っていただき、お酒を飲みながら研究以外の幅広いお話を聞かせていただきました。まさに至福のひとつきでした。

余談になりますが、畑中研に進学したことは、最初は少し苦労もありましたが、結果として自分を大きく成長させました。何の制約もない自由な研究室でしたので、「教育しない最大の教育者」の言葉通り、畑中研出身者は視野が広く、自ら道を切り拓く逞しさが宿っている方が多い傾向があります。お弟子さんたちは全国各地で活躍していますが、今の私の研究スタイルも畑中研方式そのものです。来る者は拒まず、去る者は追わず、いつもキラキラ目を輝かせて研究の話をされていた畑中先生は私の中では永遠のロールモデルであり、恩師です。

大学院修了時の1989年に運よく畑中研の助手に採用され、夢の中でも論文を書いているほどウイルス研究や分子生物学研究にのめり込んだ後、畑中教授と本庶教授に推薦書を書いていただき、1994年からはIL-3やJAK/STAT研究で名高い米国のJames N. Ihle教授の下でサイトカインシグナル伝達研究を行いました。ボスのIhle教

授は当時飛ぶ鳥を落とす勢いでしたが、共同研究を行っていた、普段の研究面では地味な印象のPeter C. Doherty教授がいきなりノーベル賞を受賞し、のどかなMemphisの街が沸き立った1996年の暮れに留学を終え、帰国しました。新しい職場は白金台にある東大医科研の北村俊雄独立准教授（当時）の研究室でした。Seattleでの学会で賞をいただいた際に、隣接するレストランで祝福の声をかけていただいたことがご縁でした。寄附講座で大学の附置研究所だったこともあり、研究費の獲得や教育活動を全く気にせず、研究だけやっていればよいという極めて恵まれた環境でした。北村先生も根っから研究を楽しむ方で、二人の東大教授をはじめ、多くの優れたお弟子さんを輩出しています。この時期を含めて現在まで実に幸運な研究者生活でした。一方、独立職探しは必ずしも順調だったわけではありません。「他流試合」で鍛えられましたが、簡単には思う存分研究できる独立職は見つかりませんでした。寄附講座の期限が刻々と迫る中、母校の教授職に応募させていただいたことが、三つ目の、研究者人生で3本の指に入る最良の選択でした。もちろん、受け入れていただいた母校には感謝しかありません。

2006年12月1日付で三重大学大学院感染症制御医学分野の教授を拝命し、20年振りに母校に戻ってまいりました。昨日のことに覚えています。初日からまさに故郷に帰ってきた感じでした。この感覚はウイルス研から第二内科の研修医に転じた際の感覚と全く同じでした。卒業生にとって母校とは本当にかげがえのない存在です。在学中はあまり意識しませんが、一度離れて再び戻った時に初めて気づかされました。紺碧の空、木々の深い緑、純白の風車が美しいキャンパスを昼食時に散策すると、この環境で研究できること、これ以上の幸せはそうはあるまい、と感ぜずにはいられません。人々の穏やかさ、やさしさも格別です。

教授在任期間は19年4か月でした。運よく公的

研究費は途切れることなく、今は念願の大型プロジェクトの代表を務めさせていただいております。研究は人との出会いに大きく左右されます。上述の諸先生方や恩師の先生方以外にも、幸運な出会いがありました。忘れもしない2008年のことでした。産学連携を担っておられる西村訓弘教授に連れられて、一人ベンチャー企業の社長さん兼研究者が私の部屋をふらっと訪ねて来られました。出身地の三重県菰野町が社名の由来であるバイオコモ社の福村正之社長は見るからに人が良さそうで、話は若干分かりにくいところもあったのですが、世の中を変えるような医療開発を行いたいという強い意志が感じられました。私は当時、北村教授の下で学んだレトロウイルスベクターを使った研究を得意としていましたが、福村社長はセンダイウイルスベクターのエキスパートであり、遺伝子組換えワクチンを開発したい、と言われました。その目的なら、当教室ではセンダイウイルスと似たhPIV2を2001年にベクター化した河野光雄講師が研究を続けておられるので、「河野先生がOKなら共同研究できますよ」というのが最初の出会いです。その日からバイオコモ社と当教室の共同研究が始まりました。かれこれ18年になりますが、まさかここまで長い連携になるとは想像だにしていませんでした。

福村社長はhPIV2のF遺伝子を欠損させ、そのF遺伝子産物を恒常的に産生する細胞株Vero/BC-Fを樹立し、その細胞株以外の通常の細胞内では全く増殖しないベクターに変え、BC-PIVと名付けました。河野講師はMまたはHN遺伝子を欠損させる改変を行っていました。研究テーマが被らないようにバイオコモ社はBC-PIVを用いて遺伝子組換えワクチンを作製していきました。山中伸弥博士がiPS細胞の樹立の際に、24種の遺伝子を細胞に同時導入するために当時世界最高水準と言われた北村教授開発のpMXベクターとPLAT-E細胞を活用されたことは知る人ぞ知る

話ですが、BC-PIVベクターとVero/BC-F細胞は遺伝子組換えワクチン作製目的には世界屈指のハイスペックプラットフォーム技術と言っても過言ではありません。このあたりの細かな技術開発は日本のお家芸とも言えます。詳細は10.1002/rmv.70008に記載しました（2024年）。

バイオコモ社との共同研究の最初の成功はエボラウイルスワクチン開発でした。私が三重大に着任した時に修士課程の1年生だった大塚順平くんを研究室に呼び戻し、小さなチームで研究を始めました。その後は大塚くんの卓越した実験技術もあり、新型コロナウイルスワクチン開発にも成功しました。これらワクチンの機能解析ではその分野の第一人者である高田礼人 北大教授や河岡義裕 東大教授にご支援いただきました。細胞性免疫を活性化する万能抗がんウイルス開発にも成功しつつあります。しかし、ヒトへの応用となると話は別です。レトロウイルスベクターと異なり、RNA依存性RNA合成酵素で転写されるhPIV2ベクターの実験系は職人芸に近く、一般に汎用されているウイルスベクターとのスペックの違いは歴然ですが、我々は世界から周回遅れと揶揄された極東のワクチン開発研究グループの一つにすぎませんでした。いや、その土俵にすら上がっていない状態、というのが正確な表現です。原因は明白で、社会実装するには全くの資金不足だったのです。これがベンチャーやアカデミアが陥る「死の谷」と呼ばれるものか、と身をもって体験しました。基盤研究Bレベルの科学研究費では最低でも桁が二つ少ないのです。一人なら途中で諦めていたでしょうが、下町ロケットのような少数精鋭の研究チームで頑張ってきましたので、途中で投げ出すわけにはいきません。世界の中で真に優れた開発品のみが最後まで生き残るという強い信念の下に福村社長、大塚研究員（社長に次いでバイオコモ社の二人目の研究員です）と共に粛々と研究開発を続けました。開発予算に関しては、

AMED/SCARDAで3回不採択になった後、これが最後と申請枠のカテゴリーと研究タイトルを書き換えてSCARDAに4回目の申請を行いました。全く期待していなかったのですが、吉報は2023年3月、唐突に届きました。これでGMP製造とPhase Iまで支援していただけます。申請書の本質的な内容はほとんど変わっていないのですが、レトリックが奏功したのか、非常に高い評価での採択でした。開発課題名は「新規細胞質型RNAウイルスベクターを用いた新興・再興感染症ワクチン作製プラットフォームの確立と遺伝子組換えワクチンのカタログ化」と異常に長いものです。簡潔に述べると、感染症有事に迅速に対応できる遺伝子組換えワクチン作製のためのプラットフォーム技術を構築する、という内容です。このプロジェクトでは社会実装する標的としてRSウイルスを選択しました。内定をいただいた日の深夜、それまでの苦汁や希望と落胆の繰り返しで仲間の顔とともに走馬灯のように蘇り、何か熱いものがこみ上げてきました。このプロジェクトはこの地、三重で必ず成功させる、と誓った静かな夜でした。

RSウイルスワクチンに関しては、2023年に海外のメガファーマ2社から注射剤のタンパク質コンポーネントワクチンが認可され、あっという間にブロックバスターになっています。高齢者や母子免疫目的の妊婦に用いられますが、乳幼児に直接投与可能なRSウイルスワクチンはありません。私たちは注射針が不要で経鼻投与できる、高齢者及び乳幼児用のRSウイルスワクチンの開発を目指しています。我が国はもちろん、RSウイルス感染で亡くなる子供が多い開発途上国でも大いに役立てたいと考えています。RSウイルスのエキスパートである札幌医科大学の小笠原徳子准教授の協力も得て動物実験では上記既存ワクチンを凌駕する効果を得ていますので、早急にヒトでの有効性、安全性を確認したいと考えています。最終

目標は、高病原性鳥インフルエンザなど、人類の存亡に関わるようなウイルスがパンデミックになる最悪時に備えて、感染そのものを防ぐ、注射針が不要な鼻スプレーワクチンを迅速に製造するシステムを確立することです。BC-PIVを基盤として作製された経鼻ワクチンは、必要とされるほぼ全ての免疫が高いレベルで誘導可能であり、安全性の担保された生ワクチンという、ワクチンとしての理想的な特性を備えています。上述のpMXとPLAT-Eは全世界の何千という研究室で汎用され、科学の進歩に大きく貢献しました。BC-PIVは簡便性ではpMXなどのレトロウイルスベクターには遠く及びませんが、ヒト樹状細胞における遺伝子発現能はpMXの約100倍高く、ワクチン開発など用途を絞った目的では突出した威力を発揮します。遺伝子が染色体に組み込まれることもありません。経鼻投与の実際は軽い感冒のようなウイルス感染ですが、投与予定のウイルスベクター量を遺伝子量に換算するとmRNAワクチンの数万分の1です。

私と福村社長のビジョンはシンプルで、BC-PIVは人類の救世主になり得る、です。例えば、平常時は抗がんウイルスを製造し、感染症有事には迅速にワクチンを作製できるプラントを国内、できれば学内に建設することが私たちの理想です。或いは、メガファーマにプラットフォーム技術として導出し、BC-PIVを世界で役立ててもらおう、という計画も夢があります。退官時に新しい研究の夢を語ることはおこがましいですが、若い人たちに迷惑をかけない範囲で研究を継続させていただけますと幸いです。研究開発は一寸先は闇という世界なので、身を引くべきときはさっと引く所存です。地域圏大学は、都会型のブルドーザータイプの研究とは異なり、自由な発想でユニークな研究開発を行っていくことで特徴が出せるのではないかと考えています。

今回、スペースの関係で白血病や細胞内シグナ

ル伝達の研究の詳細は述べませんでしたが、東大小児科大学院時代からずっと共同研究を行ってきた小埜良一 現准教授はpMXや独自の遺伝子改変マウスを用いて白血病発症の分子機構の解析を続けています。難治性白血病の根治療法の開発は研修医時代以来の私の悲願でもあります。国内の気鋭の基礎寄りの白血病研究者が年に一度集う研究会があり、来年1月末に第31回造血器腫瘍研究会を津市で私が主催させていただく予定です。

医学を学び、研修医として育てられ、好きな研究を思う存分行わせていただいた三重大大学には感謝の念に堪えません。京大、米国St Jude Children's Research Hospital、東大での21年間の研究生活も充実したものでしたが、ホーム感では母校が格別でした。本学での研究生活は、論文という面では上記3地点での生産性には及びませんでしたが、実際に新規医薬品を世の中に残すという面では、論文以上のやりがいを感じています。何とか臨床第Ⅰ相または第Ⅱ相試験まで終え、経鼻型RSウイルスワクチンの社会実装につなげたいと考えています。三重大大学に着任してからは研究以外に教育にも携わりました。母校で後輩たちを教えることは幸せな経験でした。学生さんからは、こちらがエネルギーをいただきました。大学運営面では、大学院委員会委員長、研究倫理審査委員会委員長、生命科学研究支援センター長、医学系研究科副研究科長、評議員、先端科学研究支援センター長を拝命いたしました。これらの業務の執行におきましては事務の方々に本当に助けていただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

人材輩出面では、かつての在籍メンバーのうち、西尾真智子博士が和歌山県立医科大学医学部微生物学講座教授、鶴留雅人博士が中部大学生命健康科学部生命医科学科教授、鈴木圭博士が本学医学系研究科救急集中治療医学分野教授、原健一郎博士ががん免疫細胞療法を行う株式会社NPT（2025

年1月東証上場）代表取締役役に就任しています。

三重大学には各教室に大学の費用で秘書さんが配備されるという、他大学では殆ど見られない素晴らしいシステムが存在します。円滑に教室を運営出来たのは永井（小坂）杏奈さんと後を引き継いだ橋本（大塚）咲子さんのおかげです。本当にありがとうございました。

私は、2026年4月からは新設された上級特任教授という制度で全学の研究基盤推進機構に所属し、引き続き次世代型VLPワクチン研究開発センター長として卓越型リサーチセンターでバイオコモ社と共同でワクチンと抗がんウイルス開発を行

わせていただく予定です。この三重の地から世界標準となるような感染症対策のプラットフォーム技術を発信していけるよう今後も日々精進する所存です。

約20年にわたり多大なるご支援を賜りました関係者の皆様と三医会に深く御礼申し上げます。三重大学は私のふるさとであり、ピンチではいつも助けていただきました。感謝しかありません。また、研究に専念できる環境を与えてくれている妻と二人の息子、亡き両親にはいつも感謝しています。末筆ながら、三重大学と三医会のますますのご発展を心からお祈り申し上げます。

免疫学教授就任のご挨拶

免疫学 安 間 太 郎



2025年10月1日付けで、ガバザ・エステバン教授の後任として三重大学基礎医学系講座免疫学の教授に就任しました。この場をお借りして少し自己紹介をさせていただきます。

私は三重県四日市市出身で2007年三重大学医学部を卒業し、愛知県の名鉄病院で研修の後、2009年より三重大学に戻り糖尿病内分泌内科で臨床医としての経験を積ませていただきました。当時、糖尿病分野では、現在では中心的な治療薬であるインクレチン関連薬が発売され、大変な注目を集めておりました。糖尿病の病態や薬剤作用機序を分子細胞レベルで理解する必要性を強く感じ、2011年より大学院に入学して免疫学講座で基礎研究を開始しました。大学院修了後の2015年から5年間は免疫学助教として研究や学生教育に関わりました。少しではありますが臨床を経験したことで、学生時代は極めて難解であった免疫学が大変興味深く感じられたのは大きな発見

でした。そして代謝内分泌疾患は一般的には免疫学とは遠い分野と思われがちですが、実は極めて関連が深いということを学びました。同じ頃に実臨床で免疫チェックポイント阻害薬（ICI）が使用されはじめ、癌の治療が飛躍的に進歩しました。一方でICIによる免疫関連有害事象（irAE）として1型糖尿病や内分泌疾患が高頻度に発症することが分かってきました。T細胞に発現するPD-1、CTLA-4等の免疫チェックポイント分子が内分泌疾患の発症に強く関連することは既知であり、免疫学の講義でも扱うのですが、実際に臨床医としてirAEで内分泌疾患が多発することを経験し、基礎研究の実験レベルの話が臨床と強く結びつくことを実感することができました。そうした中、2018年12月にはICIがノーベル賞を受賞し社会的にも大きく注目されることとなりました。免疫学の社会との結びつきや可能性をリアルタイムで実感できたことは自分が目指す進路に大きく影響したと思います。その後、2020年より臨床研修キャリア支援部、2022年より再び糖尿病内分泌

内科の所属となりましたが、コロナ禍で病院業務が大変な状況であったにも関わらず、周りの皆様の多大な協力のおかげで多くの基礎研究の時間をとらせていただき研究成果に繋がりました。その中でも線維症マウスの解析により新しい細菌叢由来ペプチドを発見することができ、corisinと命名した本ペプチドの研究が今後様々な分野での共同研究に発展できる可能性を感じております。

私はこれまで、臨床では主に糖尿病患者の診療を担い、様々な医療職の方とチームで診療を行ってきました。また周囲の理解と支えのお陰で基礎研究を継続することができました。こうした経験から強く感じていることはチームとしてまとまることの大切さです。現在、医学部に求められることは臨床・教育・研究と非常に多岐に渡っております。臨床面では先端的な医療を行うだけで

なく地域医療を支えなければなりませんし、教育面では多様な学生のニーズに応えることが求められます。研究面では最新技術についていかなければ勝負できないようになり、技術の習得のみならず、大きい研究費の獲得が必要不可欠です。さらに外部研究費の競争率もますます厳しくなっております。このような状況の中で、単一の講座の限られた人数でそれぞれが臨床・教育・研究のすべてに多くの時間を割くことが現実的に難しく、大きな成果を挙げるためには協力してそれぞれの得意分野を生かす必要があるのではないかと愚考しております。微力ではございますが、学内の基礎、臨床講座の先生方との共同研究を通じて少しでも三重大大学の発展に貢献できればと思います。至らぬ点もあるかと存じますが、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

教授就任のご挨拶

耳鼻咽喉・頭頸部外科 柴田博史



【略歴】

2009年 岐阜大学医学部医学科 卒業

2011年 岐阜大学医学部耳鼻咽喉科学教室 入局

2013年 京都大学iPS細胞研究所 特別研究学生

2019年 米国ハーバード大学ダナファーバー癌研究所 リサーチフェロー

2021年 岐阜大学医学部附属病院耳鼻咽喉科 講師

2023年 岐阜大学大学院医学系研究科耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野 准教授

2025年11月 三重大学大学院医学系研究科耳鼻咽喉・頭頸部外科学分野 教授

【これまでの業績】

2009年に岐阜大学医学部を卒業しました。耳鼻咽喉科の開業医であった父親の影響や、当時岐阜大学耳鼻科の准教授であった水田啓介先生の頭頸部外科手術をみて感銘をうけ、頭頸部外科医になることを志しました。初期研修修了後、当時伊藤八次教授が主宰しておられた岐阜大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室に入局しました。伊藤教授よりがん研究を行って知識を深化させることを勧められ、医師5年目に大学院に入り、京都大学iPS細胞研究所の山田泰広研究室で4年間国内留学を行い、iPS技術を用いた腫瘍エピゲノムの研究を行いました。特に、組織特異的に生体内初期化を誘導できるマウスモデルを自身で開発し、Kras発がんのエピゲノム変化が必須であること

を証明しNature Communications誌に報告することができました（主要論文1）。その後、日本医科大学の小川徹也教授よりご縁を賜り、医師10年目から2年間米国ハーバード大学ダナファーバーがん研究所の頭頸部外科医であるDr.Ravindra Uppaluri研究室に海外留学し、頭頸部がん個別化腫瘍免疫の研究を行いました（主要論文2）。Dr.Uppaluriはネオアジュバント免疫治療の臨床試験であるKeynote-689試験の主導研究者であり、近未来の頭頸部がん治療を間近で体感できる幸運に恵まれました。研究で得た人間関係、体験が非常に楽しく刺激的で、現在まで研究を続けるモチベーションになっています。帰国後は岐阜大学耳鼻咽喉科の小川武則教授に手術技術から医師の心得まで熱心なご指導を賜り、頭頸部再建手術を多数執刀させて頂き難度の高い手術も習得でき、師と環境に恵まれたと感じております。

【今後の抱負】

2025年11月に三重大学耳鼻咽喉・頭頸部外科に赴任いたしました。地方大学病院では頭頸部がんの患者数が多く、診断治療を担当しております。三重県は人口減少、高齢化が進む一方で頭頸部がん、進行がんの症例は増加傾向です。頭頸部がん治療は再建手術など大きな侵襲を伴う治療を行うことが多く、患者さんに十分納得していただき根治性と機能性のバランスがとれた治療を行えるように努めております。最近では頭頸部がん薬物療法が劇的に進化し、他にも光免疫治療やBNCTなど新規治療が多く開発され、最新のエビデンスを考慮し患者さんに最も適した治療を提案、実施できるよう研鑽を続けてまいります。研究面では、最近では特に、最も悪性度の高いがんのひとつである甲状腺未分化がんの未分化転化機構の解明や、新規エピゲノム・遺伝子治療の研究を行っています。三重大学発の研究として、臨床研究に繋がられるよう努力する所存です。また頭頸部がん

個別化免疫治療の研究、頭頸部再生治療の研究をしています。研究を通じ疾患をより深くまで理解し、結果に立脚した新規治療を提案することを常に考えています。

若手医師のキャリア支援を積極的に行うことで、医学生からみても魅力ある耳鼻咽喉・頭頸部外科教室をつくり、医局員を増やしていきたいです。地域医療に貢献し、さらに国内外に広く成果を発信できる明るく開けた教室を目指し、日々精進していく所存でございます。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

【主要論文】

1. Shibata H, Komura S, Yamada Y. et al. In vivo reprogramming drives Kras induced cancer development. Nat Commun, 9 (1), 2081, 2018.
2. Shibata H, Xu Na, Uppaluri R, et al. Integrating CD4⁺ T cell help for therapeutic cancer vaccination in a preclinical head and neck cancer model. Oncoimmunology, 10 (1), 1958589, 2021.
3. Shibata H, Saito S, Uppaluri R, et al. Immunotherapy for head and neck cancer: a paradigm shift from induction chemotherapy to neoadjuvant immunotherapy. Front Oncol, 11, 727433, 2021.
4. Sogabe Y, Shibata H, Yamada Y, et al. Characterizing primary and secondary senescence in vivo. Nat Aging, 5 (8), 1568 – 1588, 2025.
5. Shibata H, Kuroki M, Ogawa T, et al. Head and neck cancer immunotherapy : overcoming limitations and enhancing efficacy. Cancer Sci, 116(11), 2920 – 2928, 2025.

教授就任のご挨拶

環境分子医学 堀 美 香



令和8年2月1日付で、
三重大学大学院医学系研究
科環境分子医学（衛生学）
教授を拝命いたしました堀
美香と申します。当分野は、
昭和21年の三重県立医学専

門学校時代に初代・阪巻市雄教授により衛生学分野として開講され、以降七代にわたり約80年の歴史と伝統を積み重ねてまいりました。この重みある歴史を真摯に受け止め、伝統を継承しつつ、新たな時代にふさわしい教育・研究の発展に尽力する所存です。

私は北海道出身で、北海道大学薬学部を卒業後、同大学大学院にて博士（薬学）を取得しました。北海道大学では、発がんにおいて重要な酸化ストレスによる遺伝子変異抑制機構の解明を目的に、損傷ヌクレオチド誘発遺伝子変異に対するDNA修復関連蛋白質の影響を、大腸菌および哺乳動物細胞を用いて解析しました。その後、個体レベルでの発がん機構を探究したいとの思いから、国立がん研究センター研究所にリサーチレジデントとして着任し、膀胱がんの化学発がん動物モデルを用いた発がん研究および臨床検体解析を行いました。さらに、国立循環器病研究センター研究所では、遺伝性疾患である家族性高コレステロール血症の遺伝子解析および病態解明、動脈硬化研究に携わり、基礎と臨床の連携のもと、十年以上にわたり継続して研究に取り組んでまいりました。その後、教育にも力を注ぎたいとの思いから、名古屋大学環境医学研究所に異動し、患者由来iPS細胞を用いた病態解析や、医学部生とともに遺伝子改変動物モデルを用いた脂質・糖・アミノ酸代謝

の解析を行ってまいりました。

環境医学とは、さまざまな環境要因が生体および疾患に及ぼす影響を明らかにし、予防と健康維持へとつなげる学問です。人を中心に捉えると、「環境」は社会環境、自然環境、そして体内環境の三層から成り立っています。これらの均衡が破綻すると健康障害や疾病が生じます。当分野では、これら三層の環境を統合的に理解し、その分子機構を解明するとともに、予防医学へと展開する研究を推進してまいります。分野の先生方と協力しながら異分野融合を積極的に進め、研究成果を国内外へ発信し、地域の健康寿命延伸と環境と調和した持続可能な社会の実現に貢献したいと考えております。

ダイバーシティの推進は、当分野の将来を支える重要な基盤であると考えております。多様な背景や価値観、専門性が交わることで新たな視点が生まれ、創造的な研究へとつながります。そのような環境を整えることこそ、重要な責務であると認識しております。これまで私は、循環器学、代謝学、内分泌学、病理学、分子生物学、再生医療学、薬学、生化学、細胞生物学、統計学、遺伝統計学、臨床検査学など、多様な専門分野の研究者・医師と協働してまいりました。研究成果は決して一人で成し遂げられるものではなく、多様性が尊重される環境の中でこそ実現するものであると実感しております。女性医学研究者の一人として、次世代の女性研究者育成にも積極的に取り組んでまいります。性別や立場にかかわらず、誰もが能力を十分に発揮できる環境づくりを目指してまいります。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

教授就任のご挨拶

三重大学大学院医学系研究科 胸部心臓血管外科学 教授 山内 孝



このたび令和八年三月より、三重大学大学院医学系研究科胸部心臓血管外科学教授を拝命いたしました。長い歴史と伝統を有する本教室をお預かりすることと

なり、その責任の重さに身の引き締まる思いであります。医学部ニュースをお読みの皆様に、まずはご挨拶申し上げます。

私は平成九年に大阪大学医学部を卒業後、第一外科に入局し、関連施設での研修を経て心臓血管外科医として研鑽を積んでまいりました。大学院では澤芳樹教授のご指導のもと、胸腹部大動脈瘤手術後に生じる遅発性対麻痺（delayed paraplegia）に関する研究に取り組み、学位を取得いたしました。その後は成人心臓大血管外科診療を中心に、ハイリスク症例に対する治療成績向上を一つのテーマとして臨床と研究を続けてまいりました。大阪大学関連施設による多施設共同研究グループ「OSCAR」の立ち上げにも携わり、臨床現場から生まれる課題を研究として形にし、再び診療に還元していくことを目標に活動してまいりました。

また近年は大阪大学心臓血管外科診療局長として、若手外科医の教育体制の整備や関連施設との連携強化に携わる機会を頂きました。外科医志望者が減少する時代において、いかに次世代の外科医を育てていくかという課題に向き合った経験は、今後の教室運営においても大きな財産になると考えております。

三重大学胸部外科は昭和三十二年の講座開設以来、六十年以上にわたり日本の心臓血管外科を牽

引してきた歴史ある教室です。久保先生、草川先生、矢田先生、新保先生、高尾先生をはじめとする歴代教授のもと、多くの優れた業績を築いてこられました。令和七年四月より呼吸器外科が独立し、新たに胸部心臓血管外科として再編された本教室において、私が初代教授としてその役割を担うこととなりました。こうした歴史の重みを大切に受け止めながら、その伝統を次の時代へ確実につないでいくことが自らの使命であると感じております。

現在、心臓血管外科を取り巻く環境は大きく変化しています。高齢化に伴う症例の高難度化、外科医不足、地域医療体制の維持など、多くの課題があります。しかし一方で、低侵襲治療の進歩や周術期管理の向上など、医療の可能性も着実に広がっています。私は目の前の患者さん一人ひとりに誠実に向き合う臨床を何より大切にしながら、多くの診療科やコメディカルとの連携を深め、地域全体で支える医療体制を築いていきたいと考えております。

今後は三重県における心臓血管外科医療の質の向上を目指すとともに、若い医師が志と誇りを持って成長できる教室づくりに取り組んでまいります。臨床・教育・研究の三つの柱を大切にしながら、多施設連携による臨床研究を推進し、三重から全国へ、さらには世界へと発信できる研究成果を生み出していくことも目標の一つです。地域医療にしっかりと根を張りながら、同時に学術的にも存在感のある教室へと発展させていきたいと考えております。

三重での勤務はこれから始まりますが、多くの先生方から学びながら、地域医療に貢献できる教

室づくりに全力で取り組んでまいります。今後とも皆様のご指導、ご支援を賜りますよう、何卒よ

ろしくお願い申し上げます。

トピックス

第80回消化器外科学会総会 優秀演題賞を受賞して

医学部医学科6年、肝胆膵・移植外科 山田修大



2025年7月に開催された第80回消化器外科学会総会学部学生・メディカルスタッフ・初期研修医セッションにおいて優秀演題賞を受賞することができましたのでご報告いたします。受賞した演題は「膵頭十二指腸切除後の重症膵液瘻予測モデルの構築：機械学習アルゴリズムを用いた臨床予測因子の評価」です。以下、研究内容に関してごく簡単に説明させていただきます。膵頭十二指腸切除術（pancreaticoduodenectomy；PD）後の膵液瘻（postoperative pancreatic fistula；POPF）は腹腔内出血などの時に致死的な合併症をきたします。そのため、膵切除術前の慎重なリスク評価が求められますが、従来の予測方法ではその精度に限界があります。そこで本研究では、術後管理の指標となるより高精度な術後膵液瘻の

発生予測モデル構築を目的としました。研究対象は当科で2012年1月から2022年8月までにPDを行った568例のうち、適切にデータを収集され、膵尾側合併切除例、およびロボット手術と腹腔鏡手術の低侵襲手術が行われた症例を除外した、471例です。この471例をPOPF（ISGPF）非発生＋Grade A（non-cPOPF）とPOPF Grade B＋C（cPOPF）の比率を調節しながらTraining CohortとTest Cohort（7：3）に分割し、それぞれのCohortでモデルの学習と性能評価を行いました。最良モデルのAUC scoreはロジスティック回帰モデルでTraining Cohort 0.79、Test Cohort 0.81を示し、他の評価指標はAccuracy：0.71、Precision：0.42、Recall：0.90、F1 score：0.57でした。選択された特徴量はその重要度が高い順に膵性状、門脈合併切除、BMI、膵管ステント留置、術前糖尿病、性別、動脈合併切除でした。以上の結果、臨床因子のみを用いた機械学習モデルはPOPF発生の予測に有用であること、特徴量重要度解析において、軟性膵がPOPF発生に対する重要な因子であることが改めて示されました。

最後になりますが、このような素晴らしい賞を頂くことができたのは、肝胆膵・移植外科の藤井武宏先生より丁寧なご指導を賜り、また水野修吾教授には学生である私に学会発表という大変貴重な機会をお与えいただいたおかげです。さらに、研究に必要な臨床データをご提供くださっ

た飯澤祐介先生をはじめ、日頃から温かくご助言・ご支援をくださった同科の先生方のお力添え

があってこそと、深く感謝しております。

A-PHPBA2025 “HPB Fellow or Residency Travel Grant” 及び “Young Investigator Award” を受賞して

医学部医学科 6 年、肝胆膵・移植外科 山 田 修 大

2025年10月に開催されたA-PHPBA2025にて “HPB Fellow or Residency Travel Grant” 及び “Young Investigator Award” を受賞することができましたのでご報告いたします。受賞した演題は “An Ensemble Machine Learning Framework Using CT Radiomics for Predicting Pancreatic Texture and Stratifying High-Risk Patients for Postoperative Pancreatic Fistula” です。以下、研究内容に関してごく簡単に説明させていただきます。膵頭十二指腸切除術（pancreaticoduodenectomy；PD）後の膵液瘻（postoperative pancreatic fistula；POPF）は腹腔内出血などの時に致死的な合併症となることが知られています。その最大の因子は膵性状であります。術中に術者の手で触って判断されておりますが、術前評価ができない課題があります。そこで術前のCT画像を解析することで膵性状を予測し、さらにPOPFの発生の層化を目的にしました。研究対象は当科で2012年1月から2023年8月までにPDを行った619例のうち、適切にデータを収集された564例です。この564例をTrainingCohortとTestCohort（7：3）に分割し、それぞれのCohortで4つのアルゴリズムでモデルの学習と性能評価を行いました。膵性状予測モデルのAUCscoreはい

ずれものモデルでも0.84程を示し、高精度な予測性能を示しました。また予測結果の膵性状を用いて複合モデルを作成し、予測結果の膵性状のみを用いてPOPFを層化できるか解析したところ、オッズ比が19.2とリコールが0.95とスクリーニングツールとしての有用性が示されました。最後になりますが、このような素晴らしい賞を頂くことができましたのは、肝胆膵・移植外科学の藤井武宏先生より丁寧なご指導を賜り、また水野修吾教授には学生である私に学会発表という大変貴重な機会をお与えいただいたおかげです。さらに、研究に必要な臨床データをご提供くださった飯澤祐介先生をはじめ、日頃から温かくご助言・ご支援をくださった同科の先生方のお力添えがあってこそと、深く感謝しております。



膵がん撲滅の啓発活動

「パープルリボン ウォーク&セミナー 2025 in 津」を開催して

三重大学病院 肝胆膵・移植外科 岸和田 昌之
(三重パープルリボン 実行委員長)

令和7年(2025年)9月14日(日)に三重大学キャンパスにて、三重大学病院のスタッフを中心として、膵(すい)がんの啓発活動と患者さんへのサポートを目的する「パープルリボン ウォーク&セミナー 2025 in 津」を開催しました(図1, 2)。三重パープルリボン、三重大学病院、三重大学病院がん支援センター、津地区医師会、NPO法人パンキャンジャパン(膵がん患者支援団体)による共同開催です。二部制に分かれており、一部は午前、二部は午後、三重大学キャンパスを医療者と歩く啓発イベントの「パープルウォーク」、二部は午後に膵がんについて学ぶ医療セミナーの「パープルリボンセミナー」から構成されています。ウォークイベントは今年で14回目、セミナーは15回目(2013年伊勢での1回を含む)の開催となり(表1)、病院で継続的に実施しているのは世界でも三重大学病院のみと思われます。今年は、午前のウォー

クに392名、午後のセミナーに264名、ボランティアスタッフとして212名の方に参加していただきました。

今回、パープルリボン活動の意義、ウォーク&セミナーの当日の様子と開催までの経過を紹介させていただきます。

1) パープルリボン活動の意義

(1) 膵がんに対する啓発活動の重要性について

膵がんは、早期発見が困難で治療抵抗性が高く、転移・再発しやすい性質を持ち、5年生存率が改善されないことから「難治性がん」と知られ、「がんの王様」とも言われることもあります。本邦の最新のがん統計(国立がん研究センターがん情報サービス)では、膵がんの5年相対生存率(2009~2011年)は男女計で8.5%と最も予後不良です(参考:がん全体64.1%)。また、2023年

の臓器別のがん死亡数では男女計40,175人と第3位(男性4位、女性3位)であり、年々増加しています。初期症状を認めない場合もあり、症状が出現したとしても腹痛・背部痛、食欲不振、腹部膨張感、糖尿病の新規発症と膵がん以外にも起こることがあるため、見過ごされることもあります。誰もがわかる症状の一つとして黄疸が出現することがありますが、病院受診時には進行がんとなってい



図1. 表面



図2. 裏面

ウォークコースおよびセミナー内容掲載

パープルリボン ウォーク&セミナー 2025 in 津 チラシ

る場合も少なくないです。そのためにも、『早期発見』が何より重要ですが、国の指針で定めるがん検診項目（胃、肺、大腸、乳、子宮頸）には含まれていません。家系に膵がんや遺伝性膵炎の患者さんがいる方、慢性膵炎や膵管内乳頭粘液性腫瘍（IPMN）である方や、糖尿病、肥満、歯周病、喫煙、大量飲酒をされる方も高リスクであるため、自分のリスクを知り、下げられるリスクは下げることが重要です。定期的な検診では、血液検査でアミラーゼやリパーゼといった血中膵酵素や腫瘍マーカーの値が上昇していないか、超音波検査で異常はないかをチェックすることが必要です。そして膵がんが見つかったら『専門施設での治療』も重要であり、治療に直結する診断として、造影CT、造影MRI／MRCPや超音波内視鏡（EUS）検査が必須であり、治療としては、外科手術のみならず抗がん剤や放射線を併用する治療が生存率向上に効果的です。さらに食事やメンタルのサポートも必要であることより、幅広い専門家と設備が揃っている環境での治療が望まれます。したがって、膵がん撲滅のためには『早期発見』と『専門施設での治療』が必要であることを、一般の人々に知っていただくための啓蒙活動が非常に重要となってきます。

（２）三重パープルリボン活動

医療領域で知られているアウェアネス・リボンの一つとして「パープルリボン」があり、膵がん撲滅を目指しています。米国発祥で、国内ではNPO法人パンキャンジャパンが精力的に活動を行っています。当院では、早期発見を可能にする検査設備や進行がんの治療技術の強化など、膵がんの克服に向けた取組みを積極的に行ってきましたが、克服のためには膵がんについて一般市民の皆さんに知っていただくことや患者・家族のサポートも大変重要と考え、2012年から肝胆膵・移植外科を中心として、「三重パープルリボン」を設立しました。『早期発見』と『専門施設での治療』の大切さを三重県民の皆さんと共有するとともに、膵がんと闘う患者さんやご家族に寄り添い、膵がんで苦しむ方ゼロを目指して開催する啓発アクションとして、「KNOW IT（知る）」、「FIGHT IT（闘う）」、「END IT（撲滅する）」をスローガンに「パープルリボンウォーク&セミナー」を開催することになりました。また、院内では医師、看護師、薬剤師、栄養士、臨床心理士、医療ソーシャルワーカーにより、膵がん患者・家族さんが無料相談できる「膵がん教室」を160回以上開催し、のべ500人をこえる方に参加していただい

ています。さらに、医師と管理栄養士がタッグを組んだ「膵がんグルメディカル教室」も行っており、調理実習と膵がんに関連した栄養講座プログラムは、“おそろく”ですが世界初であり、12回開催し、のべ150人をこえる方に参加していただいております。その反響も大きく院外での活動にも展開しています。

三重パープルリボン ウォーク&セミナー（膵がんへの啓蒙活動とセミナー）の活動紹介2012-2025

	開催	ウォーク	セミナー	ボランティア	出来事
2012.9.9	津	211	336	120	三重パープルリボン設立、パンキャンジャパンと協同開始、HP立ち上げ、パープルリボン登場
2013.2.24	伊勢	-	401	74	伊勢医師会・日赤・伊勢市民病院と共催、パープルリボン登場
2013.9.16	津	161	216	114	台風直撃しウォークは中止するも、セミナーとセミナーは開催
2014.9.14	津	229	156	108	三草ホール確保できず、医学部講義棟に会場変更
2015.9.13	津	306	254	117	Tシャツが白に、リボンが紫に統一開始
2016.9.11	津	310	242	124	パープルリボン登場
2017.9.10	津	331	269	114	サムシングパープル開始、海津コース復活
2018.9.9	津	380	254	153	稲葉副知事、前東市長挨拶の参加、福祉系イベント参加
2019.9.8	津	390	371	190	三重大学内特設コースへ、学生ボランティア100名超える、パープルリボン登場
2020.9.13	津 (Web)	(120)	(591)	(102)	コロナにてWeb開催、鈴木知事、前東市長挨拶、セミナー(Zoom)、セミナー(YouTube Live)
2021.11.14	津 (Web)	(300)	(600)	(100)	コロナにてWeb開催、一見知事、前東市長挨拶、セミナー(Zoom)、セミナー(YouTube Live)
2022.11.6	津	259	212	122	3年ぶりに現地開催：稲葉副知事、前東市長挨拶、パープルリボン、パープルリボン登場、ライブアップ
2023.11.26	津	273	189	120	一見知事、前東市長挨拶、パープルの旗作成、企画ボランティア (医学科各学年：21名)
2024.9.15	津	294	273	149	一見知事、前東市長挨拶、着ぐるみのみーべ参加、企画ボランティア (医学科各学年：22名)
2025.9.14	津	392	264	212	一見知事、前東市長挨拶、着ぐるみのみーべ参加、企画ボランティア (100名)

表1. 三重パープルリボン ウォーク&セミナー 2012-2025年の活動紹介

2) パープルリボン ウオーク&セミナー 2025 in 津の当日の様子と開催までの経過

「パープルリボン ウオーク&セミナー 2025 in 津」は（1）パープルリボンウオーク、（2）パープルリボンセレモニー、（3）三翠ホールホワイエでのイベント、（4）パープルセミナー（膵がんに対する市民公開講座）から構成されており、さらに企画運営は（5）イベントを支えるボランティアスタッフによってなされるユニークな取り組みであり、紹介させていただきます。

（1）パープルリボンウオーク（図3）

会場は、毎年その時のコンセプトにあったコースを設定しますが、今年度は、去年のコースをベースにし、企画・運営ボランティア会議の中心である大学生が改善点を議論し、決定しました。健康としてのウオークコースのみにならず、三重大学キャンパス・三重大学附属病院の魅力を発見し、身近に感じてもらえるコース、膵がんを知ってもらうコースとバラエティに富んだ内容としました。

スタートは「三重大学講堂（三翠ホール）」前で行いますが、パープルアーチの下で来賓と学生

ボランティアの皆さんとでテープカット（写真1）を行い、膵がん患者さんのかけ声で歩きだします。中高生ボランティアは音楽とシャボン玉で華々しいスタートを演出します（写真2, 3）。コースはきれいに整備され、足下のアスファルトには緑の矢印が埋め込まれていて行き先が示されていてわかりやすくなっています。まずは、誘導スタッフとともに工学部の方へ向かい、大学のシンボルの一つでもある敷地内の風車を左手にみながら、「レーモンドホール（昭和26年、1951年建造）」に向かいます。レーモンドホールは、国の登録有形文化財で、アントニン・レーモンド設計の木造平屋建ての建物です。建築当初は三重県立大学の図書館として建設され、前面ガラス戸とする開放的南面や丸材を用いる架構等が特徴的です。レーモンドホールでは、クイズに答えて膵臓や膵がんについて学びます（写真4）。問題は三重大学医学部生の企画・運営ボランティアが作成しています。一般の方にも親しんでもらえるよう、わかりやすい絵と言葉にて作成されています。その後はUターンして再度三翠ホール前へ。昭和55年（1980年）に植樹された、医聖ヒポクラテスに由来する「ヒポクラテスの樹」の前を通過し、「翠の小径」を抜けて三翠会館へ。

来る「ヒポクラテスの樹」の前を通過し、「翠の小径」を抜けて三翠会館へ。

（写真5）三翠会館は、三重高等農林学校の開校10周年事業として建設された同窓会館で、戦前の三重大学の歴史を語る唯一現存する建物として、レーモンドホールと同様、国の登録有形文化財として登録されています。



図3. パープルリボンウオークコース（当日マップ）

三翠会館で再びクイズを楽しんだ後（写真6）は、三重大学正面玄関前を経由して生物資源学部校舎へ。白と青の対比が美しい錨のモニュメントの前が絶好のフォトスポットとなっています。こちらではチェキによる記念撮影を行います。その際に用いるパープルフォトフレームは、高校生・大学生ボランティアが「インスタ映えするように」と、色とりどりに装飾を施しています（写真7）。また、こちらでは日陰で一息つけるよう給水所が設けられています（写真8）。校舎入口で肝胆膵病棟（9階南病棟）看護師を中心とした病院ボランティアスタッフから紫と白のカーネーションを受け取ったあと（写真9）、令和5年度から新し

くなった第一生協、人文学部を通れば、ゴールの三翠ホールまではあと一息。三翠ホール前の「いつつの支えあうかたち」と題されたモニュメント（田畑進氏作、三重大学教育学部名誉教授）を左手に見ながら、パープルアーチの真下まで来ると、パープルリボンセレモニーで掲げたパープルリボンで作ったゴールテープ（写真10）を持った大学生ボランティアがお出迎え。先に生物資源学部校舎前で受け取ったカーネーションを、オアシス台（生花用吸水スポンジ）に生けます。最終的には紫250本と白350本のカーネーションの花によって、ひとつはハートと「MIE」の文字（写真11）、もうひとつはアウェアネス・リボンに形づ



写真1. テープカット



写真2. 膵がん患者さんの掛け声で歩き出す



写真3. ウォークのスタート



写真4. レーモンドホールで、膵臓や膵がんに関するクイズ



写真5. 第2チェックポイントの三翠会館前でボランティアが誘導案内



写真6. 三翠会館で再びクイズを楽しむ



写真7. パープルフォトフレームにてパープルショット



写真8. 給水所は日陰になっていて、ほっと一息



写真9. ボランティアスタッフからカーネーションを受け取る

けられたパープルフラワー（写真12）が2台完成します。また、横に設置している大きな寄せ書き用のパープルフラッグには、それぞれの思いを記します(写真13)。最後にクロージングセレモニーとして完成したパープルフラワーと共に写真撮影して第1部が11時30分頃に終了しました（写真14, 15）。

（2）パープルセレモニー

パープルウオークは膵がんと闘っておられる患者さん、ご家族には医療従事者と共に歩く事にて「どんなことにも負けない勇気と力」を共有する、

また愛する人を亡くされた方には、愛する気持ちを忘れず、追悼の気持ちを心に歩いていただく、多くの方の力の集結によって「独りでない大きなあたたかい力」を感じていただけるといったメッセージも含んでいます。また、一般の方にも膵がんをよく知ってもらいたいという啓発イベントであり、そのことを参加者に意識していただくために、ウオーク前にパープルセレモニーを開催しています。

参加者は8時30分から受付を開始しますが、受付にて先着200名にはパープルTシャツを受け取ることができます（写真16）。その際に、暑さ対



写真10. 最後はパープルリボンを繋げたゴールテープを切って



写真11. パープルフラワー（ハートと「ME」）



写真12. パープルフラワー（アウェアネス・リボン）



写真13. パープルフラッグに寄せ書き



写真14. 野本教授（副実行委員長）によるクロージングセレモニーの挨拶



写真15. 完成したパープルフラワーとともに集合写真



写真16. 配布されるTシャツは三重大学病院が作成をサポート。デザインは年代によってさまざま。



写真17. 平治煎餅にパープルリボンとメッセージを刻印した「パープル煎餅」



写真18. 中高生ボランティアが無料フェイスシールで参加者のペインティングをお手伝い

策のパープルうちわとリボンセレモニーに使用する約1mの細長いリボンを受取ります。看護師スタッフや一般参加ボランティアが待つ受付には、膀胱がん撲滅基金も設置しています。髪飾りやアクセサリなど紫のものを身につけて参加していただいた方には、サムシングパープルと名付けて、平治煎餅にパープルリボンとメッセージを刻印した「パープル煎餅」をプレゼントします（写真17）。9時のセレモニー開始まで、中高生ボランティアによる無料フェイスシールで盛り上げます（写真18）。

セレモニーは、岸和田実行委員長の開会宣言（写真19）、眞島喜幸NPOパンキャンジャパン理事長（写真20）、一見勝之三重県知事（写真21）、前葉泰幸津市長（写真22）、渡部泰和津医師会長

（写真23）、水野修吾副病院長（写真24）の挨拶から始まります。医学部生を中心とした企画・運営ボランティアよりウォークイベントについて説明した後、全員でラジオ体操をして体をほぐします（写真25）。続いては、受付にて配布された、膀胱がん撲滅のスローガン「KNOW IT（知る）」、「FIGHT IT（闘う）」、「END IT（撲滅する）」、「WAGE HOPE（希望をつなぐ）」が示されたリボンを掲げるリボンセレモニーです。司会の玉利裕佳先生（麻酔科、学生時代から8年連続司会）（写真26）と中高生・大学生ボランティアのかけ声と共に参加者が頭上にリボンを掲げます（写真27）これは、膀胱がんを知り、闘い、撲滅するといったことが、膀胱がんとの戦いに勝つためにはこの3つ全てを行う必要であるというメッセージを示して



写真19. 開会宣言
(岸和田実行委員長)



写真20. 挨拶
(眞島喜幸 NPOパンキャンジャパン理事長)



写真21. 挨拶
(一見勝之 三重県知事)



写真22. 挨拶
(前葉泰幸 津市長)



写真23. 挨拶
(渡部泰和 津医師会長)



写真24. 挨拶
(水野修吾副病院長)



写真25. 準備運動
(ラジオ体操)



写真26. ウォーク司会
(玉利裕佳先生、麻酔科)



写真27. リボンセレモニー

います。その後、360度パノラマでの集合写真（写真28, 29）を、弱視の写真家である小堀正一さん（9年連続）（写真30）にて撮影していただきます。みんなでリボンを掲げて集合写真を撮影して（写真31）セレモニーは終了となりますが、セレモニーの間の1時間はボランティアスタッフの誘導によりスムーズに進行しました。

（3）三翠ホールの前でのイベント

三翠ホールの前にて、各種ブース（生協、

パンキャンジャパン、伊藤園、三重パープルリボン、くらし相談、栄養相談、薬剤相談、緩和ケア・がんセンター）、BLS体験、寄せ書き展示、ポスター展示により、膀がんを知って学んでいただく場を設けました。

（i）三重大学生協ブースでは三重大学グッズ販売（写真32）、（ii）パンキャンジャパンプースではパンキャングッズ販売（売り上げはパンキャンジャパン活動費に寄付（写真33））、（iii）伊藤園ブースではお茶ふるまい、（写真34）（iv）三重パープ



写真28. 360度パノラマ写真



写真29. 360度パノラマ完成写真（合成図）



写真30. 写真家
（小堀正一さん：2mフォトグラファー）



写真31. 全員でリボンを掲げて集合写真を撮影

ルリボンブースでは肝胆膵・移植外科の医師などによる腹腔鏡シミュレーション（写真35）、（v）栄養相談ブースでは栄養相談とパープルベグル・パープルクッキーや（ベーグル専門店「ベーグルファンズ」と栄養士との共同開発：200円/個）、

パープル餅（とらや本家による三重パープルリボンのためのオリジナル和菓子：200円/個）の販売（代表：栄養診療部 森先生）（写真36、37）、（vi）お薬相談ブースでは薬剤相談（代表：薬剤部 上田先生）（写真38）、（vii）緩和ケアブースでは緩



写真32. 三重大学生協ブース



写真33. パンキャンジャパンブース



写真34. お茶のふるまい



写真35：三重パープルリボンブース（腹腔鏡シミュレーション）



写真36. 栄養相談ブース



写真37. ベーグル専門店ベーグルファンズと共同開発した「パープルベグル」



写真38. お薬相談ブース



写真39. 緩和ケアブース



写真40. BLS体験



写真41. 参加者の想いを記した寄せ書き。リボンセレモニーでも紹介しました。



写真42. ポスター展示

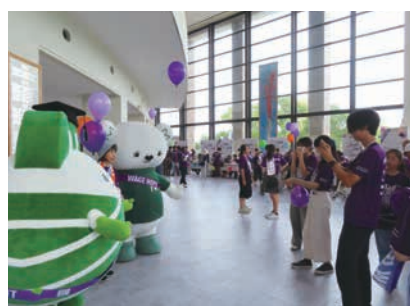


写真43. 三重大学マスコットキャラクターミールド(左)と三重大学病院マスコットキャラクター「ミーベ」(右)

和ケア相談（代表：河野師長）（写真39）、（viii）BLS体験は、三重大学・きゅうめい部がAEDや人形を用いてBLSの指導（写真40）、（ix）寄せ書き展示は、ウォークの際に記入された個々のメッセージを展示（写真41）、（x）ポスター展示では、a）三重パープルリボン活動、b）膵がん患者支援医療者ネットワーク、c）栄養士、d）膵がんグルメディカル教室、e）膵がん教室、f）看護師、g）薬剤師、h）臨床心理師、i）医療ソーシャルワーカーと、各職種の活動報告と専門的な見地からの情報を展示し、ご来場の皆様にご覧いただきました（写真42）。また、三重大学マスコットキャラクター「ミールド」と三重大学病院のマスコットキャラクター「ミーベ」は大人にも子供にも大人気でした（写真43）。

（４）パープルリボンセミナー（膵がんに対する市民公開講座）

第二部として、パープルリボンセミナーを三翠ホールの大ホールにて開催しました。セミナーは13時から16時半まで、10題の講演を行いました。ボランティアスタッフ（9南病棟 上村看護師）による司会で（写真44）、水野修吾副病院長の開演の挨拶（写真45）にて開始します。最初にNPOパンキャンジャパン理事長 眞島喜幸 先生（写真46）、国立がん研究センター肝胆膵内科長の奥坂拓志先生（写真47）による講演に続いて、「診断」（写真48）、「外科治療」（写真49）、「化学療法」（写真50）、「放射線治療」（写真51）といった膵がんの最先端情報について4講演、休憩時間をはさんで「地域医療とかかりつけ医」（写真52）、「緩和ケア」（写真53）、「薬」（写真54）、「食事」（写真55）など実際の暮らしに直結した4講演、最後に2人の膵がん患者さんに実体験をお話いただきました（写真56）。セミナー終了後は、ステージ上で演者・参加者ともに「膵がん撲滅」のかけ声を合図に集合写真を撮影しました（写真

57）。

（５）イベントを支えるボランティアスタッフ

この三重パープルリボンウォーク&セミナーの特筆すべき点は、病院スタッフ、学生、一般の方と多くのボランティアスタッフにより企画・運営されていることで、今年は212名の方にご協力いただきました。中でも中学から大学まで学生は118名以上の参加申し込みがありました（写真58）。また、ボランティアの中でも三重大学病院スタッフと医学部生が中心とした大学生からなる企画・運営ボランティア（写真59）と、当日のお手伝いをしていただいた当日ボランティアから構成されています。企画・運営ボランティアスタッフは最も大変で、21人の大学生ボランティアが企画・運営会議で意見を出し合い、当日までの準備を進めてくれています。過去に参加したスタッフが継続し参加してくれていますが、嬉しいことに、学生が興味のある学生を誘ってくれたり、過去にボランティアスタッフとして参加していた高校生が、医学部に入学し参加してくれたりするようになりました（今年で5人目を迎えました）。また、三重大学病院からもサポート体制を取っていただくことが出来て、非常に感謝しております（写真60）。

開催までのスケジュールは、大学生による企画運営ボランティアを中心に第1回会議（5月30日）、第2回会議（6月20日）にて準備を開始します。（写真61, 62）チラシの準備、役割分担などを決めていきます。第3回会議（7月18日）を経て、8月8日、三重県庁にて岸和田、学生ボランティア4名と看護師（9階南病棟）とで、告知のためのプレスリリース（記者会見）を行いました（写真63）。第4回会議（8月29日）では、中高生の最終ボランティア確認し、仕事を振り分けます。9月12日（金）18時からの第1回ボランティア全体説明会、および9月13日（土）13時からの

第2回ボランティア全体説明会（内容は1回目と同じ）にて、212人のボランティアスタッフに役割を理解していただきながら準備をすすめ、当日の9月14日（日）は7時に集合してイベントを迎えます。

中高生と一般の方からなる当日ボランティアの役割は、多岐にわたります。中高生は前日からの i) パープルライトアップ（写真64, 65）、ii) 会

場装飾（写真66）、iii) 風船作成（写真67）に始まり、当日はiv) パープルウーマン、v) ラジオ体操・ウオーク、vi) リボンを渡す人、vii) リボンセレモニー（挙げる人）、viii) シャボン玉隊（写真68）、ix) レーモンドホール（クイズ）、x) 三翠会館（クイズ）、xi) バルーンアート、xii) パンキャンブースなどを担当し、ボランティアスタッフとして、楽しんでもらいながらも学んでも



写真44. パープルセミナー司会
（上村茜さん、9階南病棟看護師）



写真45. 開演の挨拶
（水野修吾副病院長）



写真46. パンキャンジャパンの活動について
（NPOパンキャンジャパン理事長 眞島喜幸 先生）



写真47. 医療者とのコミュニケーションと情報収集のコツ
（国立がん研究センター中央病院 肝胆膵内科長 奥坂拓志 先生）



写真48. 膵がんの診断の最前線
（三重大学附属病院 消化器肝臓内科 医師 浦田美奈子 先生）



写真49. 膵がんの外科治療
（三重大学 肝胆膵・移植外科 教授 水野修吾 先生）



写真50. 膵がん化学療法の現在
（三重大学附属病院 消化器肝臓内科 野瀬賢治 先生）



写真51. 膵がん放射線治療
（三重大学大学院医学系研究科 先進がん治療学講座 教授 野本由人 先生）



写真52. 膵がんの早期診断における地域連携の取り組みについて
（草川医院 院長（公益社団法人津地区医師会 地域包括ケア担当） 草川雅之 先生）



写真53. がん治療と生活を支える緩和ケア
（三重大学附属病院 緩和ケア科／緩和ケアセンター 助教 竹口有美 先生）



写真54. 患者さんやご家族に伝えたいお薬の話
（三重大学附属病院薬剤部 薬剤師 岩田真理子 先生）



写真55. 膵がん診断時から気をつけたい栄養の話
（三重大学附属病院 栄養診療部 管理栄養士 廣島佑希子 先生）

らえるように企画ボランティアスタッフが声掛けをし、みんなで実行していきます。会の終了後にはボランティアスタッフ証明書と記念図書カードを渡して良い思い出となるようにお渡ししています。

す。

企画ボランティアスタッフおよび大人中心の一般ボランティアは、会場設営と解体（ウオーク：テント運搬・ウオーク会場設営など。セミナー：



写真56. お二人のすい臓がん患者さんによる治療体験談



写真57. パープルリボンセミナーのクロージングフォト



写真58. ご協力いただいたボランティアスタッフの皆さん



写真59. 企画・運営ボランティア



写真60. 三重大学病院よりサポート



写真61. 大学生を中心とした企画運営ボランティア会議で当日のための準備を進めます



写真62. 大学生を中心とした企画運営ボランティア会議で当日のための準備を進めます



写真63. 三重県庁でのプレスリリース（8月8日）

会場設営、音響、セミナーマイク、照明、PC調整など)、駐車場誘導、コース誘導など、縁の下の支えとしての役割を果たしていただいております。

特に、企画ボランティアスタッフは企画段階から積極的に取組んでもらい、前日から当日にかけては中高生ボランティアの声掛けから会の運営ととりまとめ、イベント終了後のボランティア懇親会(三翠ホール内小ホール)の企画も担っても

らっており、感謝の一言につきます(写真69,70)。

大きなトラブルもなく無事、盛会裏に終えることができました。最後になりましたが、三重大学病院の事務・医療スタッフ、多数応募していただいた学生・一般ボランティア、製薬企業や医療機器企業の皆様には、様々な形にてご支援・ご協力を頂きましたことをこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。



写真64. パープルライトアップ準備



写真65. パープルライトアップ



写真66. 会場装飾
(中高生ボランティア)



写真67. 風船作成
(中高生ボランティア)



写真68. シャボン玉隊
(中高生ボランティア)



写真69. 企画運営ボランティア(ボランティア代表 倉石由美さん)



写真70. ボランティア懇親会の様子

第99回日本糖尿病学会中部地方会

若手優秀演題賞セッション 最優秀演題賞を受賞して

糖尿病・内分泌内科 / 臨床研修・キャリア支援部 岡 野 優 子



この度、2025年9月6日（土）～7日（日）に名古屋コンベンションホール（ささしまライブ）で行われた第99回日本糖尿病学会中部地方会において、若手優秀演題賞セッションで最優秀演題賞をいただきましたので、謹んでご報告申し上げます。

受賞した演題は、「細菌叢由来ペプチドcorisinが尿細管上皮細胞の老化を促進する」です。近年、細菌叢が慢性腎臓病（CKD）の進行に関与する

可能性が示唆されていますが、その分子機序は十分に解明されていません。私たちは、糖尿病による腸内細菌叢の変化が細胞老化を介して腎線維化を促進するとの仮説のもと、細菌由来ペプチド「corisin」に着目しました。ヒト尿細管上皮細胞を用いたin vitro実験により、corisinが細胞老化関連遺伝子の発現を増加させることを明らかにしました。本成果によって、細菌由来因子が尿細管障害およびCKD進行に関与する新たな機序が示唆されました。

今後は、本研究で得られた知見を基盤として、細菌由来因子による腎線維化の機序解明をさらに進めるとともに、腎臓疾患のみならず他疾患における役割についても研究を展開し、新規治療戦略の確立に貢献できるよう努めてまいります。

このたびの受賞は、日頃よりご指導を賜っている先生方のご支援の賜物であり、研究のご指導をいただいている安間太郎先生をはじめ免疫学講座の先生方、臨床を支えてくださる糖尿病・内分泌内科の先生方に心より感謝申し上げます。今後も研鑽を重ね、臨床と研究の双方に貢献できるよう努めてまいります。

第29回日本心不全学会学術集会最優秀賞を受賞して

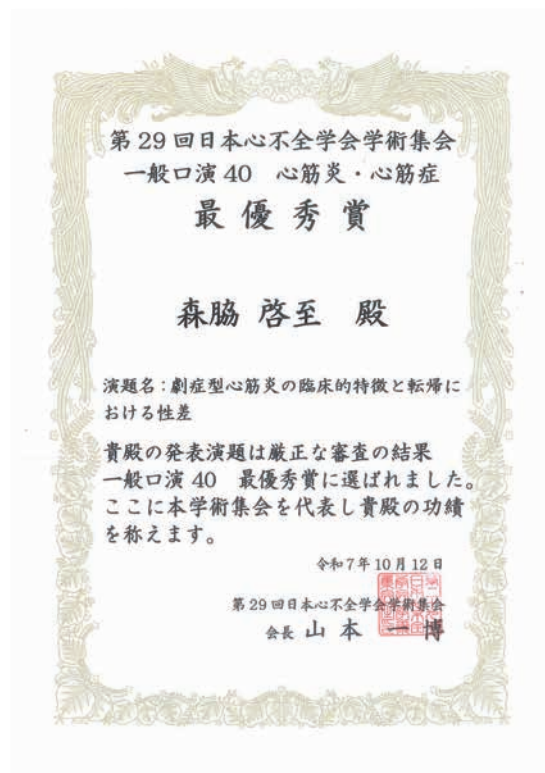
三重大学大学院医学系研究科 循環器・腎臓内科学 森 脇 啓 至

2025年10月10日（金）～12日（日）に米子コンベンションセンター Big Ship / 米子市文化ホールにて開催されました第29回日本心不全学会学術

集会において、「劇症型心筋炎の臨床的特徴と転帰における性差」の演題で一般口演（心筋炎・心筋症）最優秀賞を拝受いたしました。ご指導・ご

本研究にあたり、日々の診療の中で支えてくださる諸先生方に改めて深謝申し上げます。今回の

受賞を励みに、引き続き一例一例の診療に真摯に向き合い、重症心不全・心筋炎診療の質向上に貢献できるよう努めてまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



循環器内科 宇野 拳 太



HFpEF（左室駆出率の保たれた心不全）はHFrEFと比べ病態が多様で、有効な治療が限られております。近年は病因（etiology）や表現型に基づく個別化治療の重要性が注目されており、

本研究ではHFpEFで頻度の高い症状である息切れ、すなわち運動耐容能低下に、びまん性心筋線維化が関与する可能性に着目しました。

当院のHFpEF症例を対象に、心臓MRIで心筋線維化の指標である心筋細胞外容積率（ECV）を、CPETで運動耐容能の指標であるPeak VO₂（最大酸素摂取量）を評価しました。非肥満群と肥満群の間でECVおよびPeak VO₂自体に有意差はありませんでしたが、関連の仕方が異なりました。肥満群ではECVとPeak VO₂に関連を認めなかった一方、非肥満群ではECVが高いほどPeak VO₂が低いという有意な負の相関を認めました。以上より、非肥満HFpEFでは心筋線維化が運動不耐の重要な規定因子となり得る一方、肥満HFpEFでは線維化以外の要因がより関与する可能性が示され、表現型に応じた治療戦略の必要性が示唆されました。

本研究の遂行にあたり、中森先生、藤本先生をはじめ諸先生方より、研究の着想から解析、国際学会での発信に至るまで多大なご指導を賜りました。多忙な中でも一貫して叱咤激励と熱のこもっ

たご指導をいただき、心より感謝申し上げます。

私は現在、心不全管理アプリ「ハートサイン」を用いたSHARE-CR研究に携わっております。本研究では、日本ではまだ十分に普及していない非同期型の心臓リハビリテーションの有効性を少しでも示すことを目指し、三重大大学以外にも合計5施設の関連病院の先生方にご協力いただいております。関連病院の先生方には日常診療でご多忙の中、多大なご協力をいただき、深く感謝申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

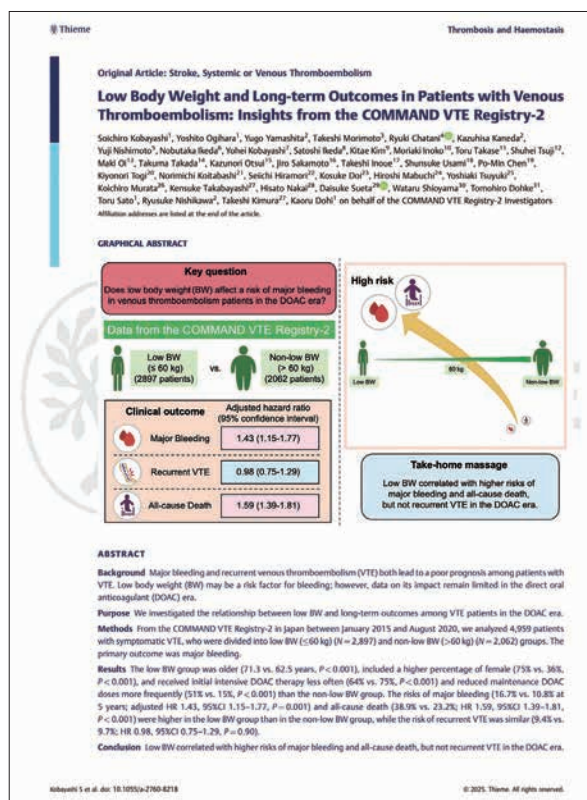


第166回東海・第151回北陸 日本循環器学会合同地方会AHA国際交流助成、 AHA Council on Peripheral Vascular Disease (PVD) Travel Grantを受賞して

循環器内科 小林 壮一郎



前年度に続きましてAmerican Heart Association Scientific Session 2025に演題採択され、第166回東海・第151回北陸日本循環器学会合同地方会において国際交流助成を賜り、さらに今年はありがたいことにAHA Council on Peripheral Vascular Disease (PVD) Travel Grantも頂戴し、アメリカ・ニューオーリンズにて発表させて頂きました。これもひとえに、荻原先生をはじめ多くの先生の温かく力強いご指導のおかげかと存じます。この場をお借りしまして皆様に改めて心から感謝申し



上げます。

開催地であるニューオーリンズは、歴史ある街並みと独特の音楽文化が融合した魅力的な都市で、学会の合間に散策したフレンチクォーターの風景は強く印象に残っています。ただ、滞在中は円安の影響を痛感する場面も多く、海外で研究活動を行うことの現実も身をもって経験しました。

肝心の学術集会では、昨年と比べると多少は緊張も和らぎ、発表後の質問にも比較的対応することができました。その一方で、PVD Travel Grant受賞者として招待されたディナーでは、世界各国の先生方と同席させて頂くという大変光栄な機会を頂きながら、終始緊張しっぱなしでした。英語での雑談力、自身の研究内容を端的に伝える力の重要性を改めて痛感いたしました。また、今回同行した宇野君との滞在は、移動や食事、ちょっとしたハプニングに至るまでエピソードに事欠かず、学術的にも人間的にも実りある時間となりました。異国の地で共に挑戦し、語り合った経験は今後の大きな財産になると感じています。

ちなみに今回発表させて頂いた内容に関してはCOMMAND VTE Registry-2のサブ解析として「DOAC時代の症候性VTE患者における低体重と長期転帰」について検討したものです。Warfarin時代では低体重患者は死亡率及び出血性合併症が高いことが知られていましたが、治療の主流が、低体重患者であっても出血性合併症に対する安全性の高いプロファイルを有するDOACに移り変わった中で長期転帰にどのように影響するのか興味を持ち、このテーマを頂きました。2015年1月から2020年8月までの4,959人のVTE患者を、低体重(≤60kg)群(N=2,897例)と非低体重(>60kg)群(N=2,062例)に分けて5年間の大出血、VTEの再発、全死亡を評価しました。低体重群では、非低体重群と比較して、大出血および全死亡のリスクが高かった一方で、VTEの再発リスクは同程度であったことがわかり、やはりDOAC時代においても低体重患者では出血性合併症への慎重な管理が必要であると考えられます。

今回の経験を糧に、今後も日常診療に真摯に向き合うとともに、学会発表、臨床研究、論文投稿により一層取り組んでいく所存でありますので皆様今後ともご指導ご鞭撻の程どうぞよろしくお願い申し上げます。



武田科学振興財団 海外研究留学助成採択を受けて

形成外科 細 見 謙 登



この度、武田科学振興財団の2026年度海外研究留学助成に採択され、オーストラリア・メルボルンにあるMonash大学Martino研究室への研究留学が実現することとなりました。留学に至るまでの経緯や私の思いとともに、謹んでご報告申し上げます。

研究留学を志した背景と思い：

私は形成外科医になった当初は、ただただ臨床の道を突き進もうと考えていましたが、学会で情熱的に研究成果を発表する先生方の姿に心を動かされ、研究をしたいという思いが日に日に強くなりました。そして、研究留学が私の大きな夢のひとつになりました。

しかし、臨床中心の業務の中で研究留学の道を自ら切り拓くにはハードルがあります。同じような環境にいる先生方なら想像に難くないと思います。私も三重大学形成外科に赴任していなければ、おそらく留学は実現しなかったと思います。

2023年度にこちらを訪れてから、様々な出会い

が私を後押ししてくれたと感じています。成島先生は心から楽しそうに日々研究に取り組んでおり、常に刺激を与えてくれます。修復再生病理学の今中先生、丸山先生には多くの研究相談に乗っていただき、暗中模索の私に道筋をくれました。また、当科の研究を支えてくださっている平野先生、中川先生は豊富な研究経験をもとに最も身近な立場から支援してくれました。そして、留学に本腰を入れるきっかけをくださったのは乳腺外科学教授の河口先生です。この他にも多くの先生方との出会いやご支援によって、今回の留学にたどり着くことができました。改めて、心より感謝申し上げます。

留学先での研究内容と希望理由：

まず、現在形成外科では、組織再生を実現するイモリを対象として、特に“免疫”と“神経”に注目した研究を行っています。つまり、「どうやったら組織を完全に再生することができるのか」という究極的な問いに対して、「イモリの免疫と神経が持つ機能の解明」から突破口を見出そうとしています。私は特に免疫に着目しているため、組織再生と免疫をテーマにした研究室で、特に神経を絡めた展開ができそうなところがよい、と考えようになりました。

留学先であるMartino研究室では、組織修復に対する“免疫”を、研究の主軸に置いた研究を行っています。そして近年では、さらに“神経”を加えた“神経-免疫相互連関”というシステムが、傷の治りを強力にサポートすることを報告しています (Lu YZ, et al. Nature. 2024)。特にこの論文に興味を持ったことが留学を希望するきっかけ

となりました。

留学先での研究内容：

本助成金の申請には全く新しい研究内容で挑みました。

「なぜ加齢とともに傷の治りが遅くなるのか」という問いに対し、「免疫や神経などの全身的な制御機構の老化」という視点から明らかにしようとする研究です。特に、私の強みである外科的技術を応用した皮膚移植モデルによる革新性を提案しようと試みています。

傷の治癒は、局所的には皮膚皮下組織が進めるが、この局所的な治癒はマウス個体が担う全身的な制御機構(免疫・神経・血管・サイトカインなど)に支えられている、という点に着目しました。そして、どんなマウスに対しても、一律に若いマウスの皮膚を移植すれば、局所的な治癒の条件を揃えることができるのではないかと、いう着想から今回の計画を膨らませていきました。例え

ば、老化マウスをホストとして若い皮膚を移植する群と、若いマウスをホストとする群を比較することで、老化した全身的な制御機構のみの影響を抽出して解析できるかもしれない、という考えです。留学先では様々な研究を展開されていますが、この研究計画を私の独自性として持ち込めればと考えています。

今後の展望：

留学先ではマウスを対象としますが、免疫と神経が研究の主軸となります。留学中には“傷をよりよく治す”という課題に挑み、帰国後には“組織を再生する”という研究につなげていきたいと考えています。

留学中には言語的な壁や研究に対する力量不足など、多くの困難が待ち受けていると思いますが、いまのこの気持ちを忘れずに踏ん張りたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

『第39回日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会総会 総会賞』 を受賞して

腎泌尿器外科 西 川 晃 平

日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会は、日本における泌尿器科領域の内視鏡・低侵襲手術の発展を目的に、1990年に「日本Endourology・ESWL学会」として設立されました。その後、2011年に「日本泌尿器内視鏡学会」、さらに2021年に現在の名称へと改称され、現在では内視鏡・腹腔鏡・ロボット支援手術に関する最新の研究発表、教育講演、技術認定、ガイドライン作成などを通じて、日本の泌尿器科低侵襲医療の質と安全性の向上に貢献しています。

このたび、2025年10月30日から11月1日に京王プラザホテルで開催された第39回日本泌尿器内視

鏡・ロボティクス学会総会において、総会賞（ビデオ部門）を受賞することができました。受賞演題は「da Vinci SPを用いた下腹部完全後腹膜アプローチによる腎尿管全摘除術の経験」です。

da Vinci SPは単孔式ロボット支援手術プラットフォームとして低侵襲手術に大きく貢献しており、特に狭小術野での操作性に優れるという特長から、従来とは異なる新しい術式の開発が進んでいます。当院では2024年1月にda Vinci SPを導入し、泌尿器科領域において前立腺全摘除術、腎部分切除術、腎盂形成術、腎尿管全摘除術などに応用しています。

da Vinci SPによる上部尿路手術では、新たな腎臓への到達法として下腹部後腹膜アプローチが注目されています。当科でも腎尿管全摘除術および閉鎖リンパ節郭清術に本アプローチを採用し、その有用性を実感しています。一方で、本術式に関する報告はまだ少数例にとどまっており、安全性や制癌性の十分な検証には今後の検討が必要で

す。引き続き術式の改良と有用性の検証を重ね、より完成度の高い術式の確立を目指していきたいと考えています。

最後に、本学会を開催された日本医科大学泌尿器科学教室の先生方、ならびに日頃よりご指導・ご協力いただいている本学教室員の先生方に心より御礼申し上げます。

日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会2025 ベストプレゼンテーション賞を受賞して

附属病院薬剤部 講師 朝 居 祐 貴



この度、2025年10月26日に開催されました、日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会2025において、ベストプレゼンテーション賞を受賞いたしました。今回、受賞テーマ「慢性腎臓病ステージ4-5における腎排泄型抗不整脈薬の血漿中濃度に及ぼす心不全の影響」について紹介させていただきます。

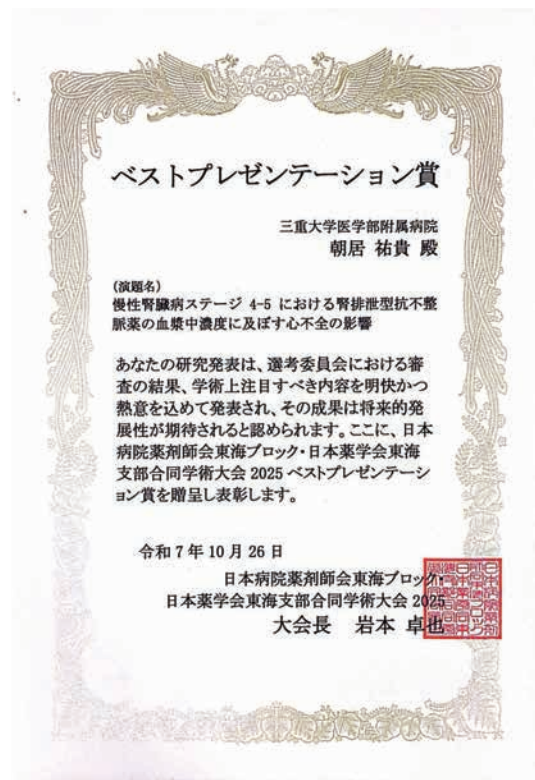
超高齢化社会に突入した本邦では、腎機能が高度に低下した慢性腎臓病を有する患者数は増加し

ています。さらに慢性腎臓病患者は、心不全の併存率が高いことが知られています。そのため、これらの患者では、薬物の排泄経路が主に腎臓（尿中）である腎排泄型薬物の体外への排泄能は腎機能低下に加え、心不全による心拍出量の減少により低下することで、血中薬物濃度の中毒域到達リスクが上昇すると考えられます。特に、慢性腎臓病の病期が進んだステージ4-5に心不全を併存している場合、そのリスクが高いのではないかと考えました。そこで私は、ステージ4-5の慢性腎臓病患者における心不全併存が、中毒症例が多数報告されている腎排泄型抗不整脈薬ピルシカイニド、ジゴキシシン及びシベンゾリンの血漿中濃度に及ぼす影響を明らかにする必要があると考えました。しかしながら、このような特殊な患者集団における研究を行うためには、サンプルサイズの確保が障壁となります。今回、国立病院機構66病院の電子カルテデータを集積している医療ビッグデータ（診療情報集積基盤データベース）を用いた後ろ向きコホート研究を実施することとしました。結果として、ピルシカイニドにおいて、心不全併存群で非併存群に比べて、有意に血漿中濃度／投与量比が高値を示しました($p=0.019$)。一方、心不全併存群ではクレアチニンクリアランスが有

意に低値を示しました ($p=0.006$)。このピルシカイニドにおける血漿中濃度／投与量比の上昇は、心不全併存に伴うクレアチニンクリアランスの低下により生じたと考えられました。また、ジゴキシンおよびシベンゾリンでは、心不全併存群と非併存群における血漿中濃度／投与量比に有意差は認められませんでした。これらのことから、慢性腎臓病ステージ4-5の患者における心不全の併存が腎排泄型抗不整脈薬の血漿中濃度に与える影響は限定的であり、心不全併存の有無よりも、従来のクレアチニンクリアランスに基づいた投与量調整が重要であることが明らかとなりました。

最後に、本研究に際して、終始あたたかく御指導、御鞭撻を賜りました三重大学医学部附属病院薬剤部・医学研究科 臨床医学系講座 臨床薬理学 教授 岩本卓也博士に心より感謝致します。また、診療情報集積基盤データベースを用いた解析に際してご指導賜りました昭和医科大学 臨床疫学研究所 講師 井上紀彦博士、国立病院機構

総合研究センター 診療情報分析部 研究員 橋本悠生博士に深甚なる謝意を表します。



第95回日本感染症学会西日本地方会学術集会・第73回日本化学療法学会 西日本支部総会合同学会 ポスターAward優秀賞を受賞して

附属病院薬剤部 森 川 祥 彦

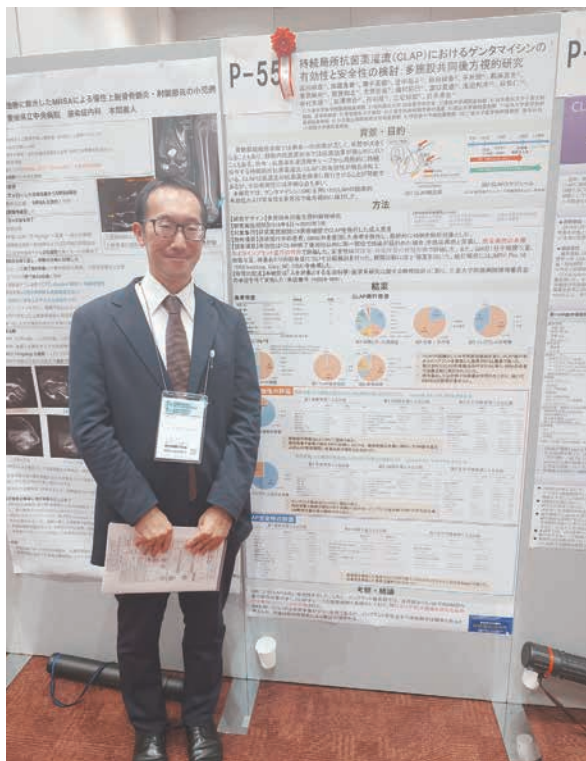
この度、2025年11月28日（金）から30日（日）にかけて福岡国際会議場（福岡市）にて開催されました第95回日本感染症学会西日本地方会学術集会・第73回日本化学療法学会西日本支部総会合同学会におきまして、ポスターAward優秀賞を賜りました。ここに謹んでご報告申し上げます。

受賞演題は、「持続局所抗菌薬灌流（CLAP）におけるゲンタマイシンの有効性と安全性の検討：多施設共同後方視的研究」です。

骨軟部組織感染症に対する新たな治療法である抗菌薬局所持続灌流（continuous local antibiotics

perfusion：CLAP）は、感染部位の骨に骨髓針を留置し、抗菌薬を直接投与することで、少量の薬剤を高濃度かつ長時間にわたり局所へ作用させる治療法です。高濃度の抗菌薬を病巣に集中的に分布させる一方、全身血中への移行が少ないことから、有害事象の発現頻度は比較的低いと考えられています。しかしながら、これまでの報告は主に症例報告にとどまり、十分な症例数に基づく検討は限られていました。

本研究では、CLAPに用いられるゲンタマイシン（GM）の有効性および安全性を明らかにすることを目的に、全国8施設による多施設共同後方



視的研究を実施いたしました。その結果、GMを用いたCLAPは感染再燃が少なく、有害事象も限定的であり、骨軟部組織感染症に対する有用な治療選択肢となり得る可能性が示唆されました。一方で、インプラント感染を伴う症例では治療効果が得られにくい可能性も示され、今後の検討課題が明らかとなりました。

今後は、GMの血中濃度や排液中濃度の測定を含めた前向き研究を通じて、より客観的なデータに基づく有効性・安全性の評価を行い、CLAPの適正使用と治療成績向上に貢献していきたいと考えております。

本研究は、私にとって初めての多施設共同研究であり、研究デザインの立案やデータ収集・整理、施設間調整など、多くの課題に直面いたしました。しかしその過程で、臨床研究を遂行する上での実践的知見と貴重な経験を得ることができました。本受賞を励みに、今後も臨床に根ざしたエビデンス創出に努めてまいります。

最後に、本研究にあたり整形外科の立場から研究デザインについてご指導を賜りました松阪中央総合病院 院長補佐・整形外科 浅沼邦洋先生、三重大学 整形外科学助教 萩智仁先生、研究全般にわたりご指導いただきました三重大学医学部附属病院 薬剤部・医学研究科 臨床医学系講座 臨床薬理学教授 岩本卓也先生、准教授 加藤秀雄先生、ならびにデータ集積にご協力いただきました各施設の諸先生方に、心より深く御礼申し上げます。

学会だより

第10回西日本医学生学術フォーラムを開催して

第10回西日本医学生学術フォーラム実行委員会 実行委員長
統合薬理学 八十島 左 京

この度、2025年12月20日（土）に三重県総合文化センター（津市）にて第10回西日本医学生学術フォーラム（西日本医学生学術フォーラム2025、West Japan Medical Student Academic Forum 2025、WJMSF2025）を開催させていただきました。2018年12月15日（土）に三重県医師会館（津市）

にて第3回フォーラムを開催させていただいて以来（実行委員長：宮尾遼先生、当時医学科3年、現四日市羽津医療センター）7年ぶりの三重県での開催となりました。今回



フォーラムロゴ



フォーラムフライヤー

のフォーラムでは20大学（50音順：愛媛大学、岡山大学、大分大学、大阪大学、大阪公立大学、関西医科大学、京都大学、久留米大学、熊本大学、神戸大学、佐賀大学、島根大学、東京女子医科大学、鳥取大学、名古屋大学、名古屋市立大学、奈良県立医科大学、兵庫医科大学、福井大学、和歌山県立大学）より現地104名、オンライン13名の計117名の方々にご参加いただき、口頭発表14演題、ポスター発表20演題の素晴らしいご発表をいただきました。フォーラムは盛会のうちに終了いたしました。ご参加、ご協力いただいた全ての方々にご場を借りて深く御礼申し上げます。

第10回目という節目のフォーラムを主催させていただくにあたり、多くのことに挑戦し、様々な学びがありました。中でも、公式ホームページ作成（<https://wjmsf2025.jp/>）と財団への学術集会開催助成申請と採択は普段の学生生活ではなかなか経験し難い貴重な経験となりました。今回、フォーラムテーマを「つながる知の絆、医学生の挑戦-10年の節目に」とさせていただきました。このテーマには、10回目を迎える本フォーラ

ムが紡いできた医学生や教員との絆をさらに深め、研究に励む医学生の方々が互いに連携し、次の10年へと飛躍するきっかけを作りたいという思いが込められています。当日はあいにくの天気となりましたが、口頭発表すべてで活発な質疑応答が行われました。続く午後からのポスター発表では、天気も回復し、こちらも白熱した質疑応答が続きました。今回はポスター会場に三重大学カフェサークルLe Lienさん（三重大学工学部総合工学科3年、仲田留奈さん代表）をお呼びし、ドリンクサーブをいただきました。ドリンクを片手にリラックスした雰囲気での発表が展開されました。特別企画では過去受賞者の先生方、第1回フォーラム関係者の先生方からビデオメッセージをいただき、学生へのエールとともにメッセージをいただきました。その後の会場グループディスカッションでは、医学生が大学の垣根を超えた新しい出会いに触れ、会場が盛り上がりました。閉会後の心残りは、進行が押してしまい、施設撤収時間の都合から受賞者の方々の写真撮影、会場参加者の方々全員との記念撮影を行えなかったことです。誠に申し訳ない気持ちです。至らなかった点、反省点などは多々ございますが、実行委員長を担当させていただき、1年生から5年生までの15名の実行委員とともに作り上げた今回のフォーラムは、非常に思い出深いものとなりました。以下に、8名の学生実行委員の方々から開催後記をお寄せい



口頭発表会場の様子



ポスター発表会場の様子

いただきましたので、ご覧いただければ幸いです。

最後に、本フォーラム開催にあたりご支援いただいたセコム科学技術振興財団様、三医会－三重大学医学部医学科同窓会様に深謝申し上げますとともに、ご尽力いただいた伊藤副実行委員長をはじめとする学生実行委員の皆さん、世話人の西村有平先生、協力いただいた俵功先生、昼食をご提供いただいたベーグルファンズ様、ドリンクサーブをいただいた仲田さんをはじめとする三重大学カフェサークルLe Lienの皆さん、オンライン配信にご尽力いただいた株式会社メディアコア様、懇親会実施にあたり多大なるご高配とご尽力を賜りましたRIZ CAFE様、種々にわたりお世話になりました統合薬理学分野秘書の池山理恵様をはじめとする関係者の全ての方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

【開催後記】

●医学科5年 矢野 太一（耳鼻咽喉・頭頸部外科学）

この度、西日本医学生学術フォーラム2025の実行委員として運営に携わらせていただき、普段の学生生活では得難い、非常に貴重な経験を行うことができました。以下に、実行委員としての活動を通じて得た学びと感想を記させていただきます。



第10回西日本医学生学術フォーラムの実行委員（敬称略）
前列左から：梅村、渡邊、山口、八十島、伊藤、矢野
後列左から：武藤、伊藤、杉原、大崎、小林、世古口、山方、築留、谷口

本フォーラムの実行委員としていくつかの役割を担当させていただきましたが、その中でも最も重要であり、責任の重い役割であったと感じているのが、口頭発表の座長です。口頭発表は、本フォーラムを象徴する企画であり、最も緊張感があり、また参加者の皆様が大きな期待を寄せている場であったと思います。座長の使命は、発表を円滑に進行させるとともに、発表者と聴講者の双方が学問を深められる場をつくることでした。発表時間の管理を行いながら、聴講者として質疑応答にも参加するなど、リアルタイムで進行する発表の中で複数の役割を同時に担う必要があり、座長という役割の難しさを強く実感しました。また、本番の雰囲気のにまれそうになるほど、口頭発表にかかる参加者の方々の真剣な姿勢が強く印象に残っています。セッションのすべての発表が終了し、会場が拍手に包まれた瞬間には、大きな安堵を覚えました。口頭発表において座長を務めたことで、セッション全体を俯瞰的に捉える視点を得ることができ、今後、医師として発表や聴講の機会に臨む際にも、この経験を活かしていきたいと考えています。

また、実行委員として活動する中で、多くの後輩と出会うことができました。学年の垣根を越え、西日本の医学生が参加する一大イベントを成し遂げる経験を通じて、実行委員の強い団結力を感じ

ました。当日の会場設営では、私が担当した部屋は時間的にも非常にタイトで、想像以上に大変な状況ではありましたが、後輩たちと力を合わせて全力で乗り越えた経験は、今でも強く心に残っています。今回のフォーラムを通じていただいたご縁に、心より感謝申し上げます。

最後に、西村先生、俵先生、池山様、実行委員の皆様、そして実行委員に誘ってくださった八十島委員長に、この機会をお借りして厚く御礼申し上げます。本フォーラムの今後ますますの発展と継続を、心より祈念申し上げます。

●医学科5年 山方 幹太（耳鼻咽喉・頭頸部外科学）

西日本医学生学術フォーラムの実行委員として、本フォーラムの運営に携わりました。

準備では、特別企画に関する過去の受賞者の先生方との連絡や、送っていただいた動画の編集を担当しました。限られた時間の中で形にしていく過程は大変でしたが、フォーラムの歴史や思いに触れる機会となりました。

当日は口頭発表の座長を務める機会をいただき、発表者の熱意や工夫を間近で感じることができました。それぞれ研究分野が大きく異なる発表を通して、普段自分に取り組んでいる分野とは異なる視点や発想に触れ、新たな刺激を受けました。また、同じ立場の学生が真剣に研究に向き合っている姿に触れ、大きな励みとなりました。

また、実際にフォーラムに参加し、発表や企画を通して、普段は一人で黙々と取り組んでいる研究を他者と共有できる場の大切さを感じました。同じ志を持つ仲間が存在に刺激を受け、今後もさらに研究に励んでいきたいと思います。

最後に、本フォーラムの開催にあたり、実行委員長として全体を牽引してくださった八十島さん、また共に運営に尽力した実行委員会の皆様に心より感謝申し上げます。また、多方面からご指導・ご支援を賜りました西村先生、俵先生、池山様に

深く御礼申し上げます。

さらに、本フォーラムの実施に際しご支援をいただいた公益財団法人セコム科学技術振興財団、三医会三重大学医学部医学科同窓会の皆様に、厚く御礼申し上げます。後も本フォーラムが継続し、より多くの学生にとって実りのある場として発展していくことを願っています。

●医学科4年 伊藤 弘晃（統合薬理学）

去る12月20日、三重県総合文化センターにて「第10回 西日本医学生学術フォーラム」が開催されました。当日は20大学より、現地・オンライン合わせて計117名の方にご参加いただき、口頭発表14演題、ポスター発表20演題が行われました。おかげさまで盛会のうちに幕を閉じることができ、まずは副実行委員長として安堵しております。本稿では、運営の舞台裏と、そこで得られた学びについて報告させていただきます。

例年、本フォーラムは学生が主体となって運営していますが、会場はまさに学生ならではの熱気に包まれていました。当日は朝から会場設営やポスター掲示板の設置に走り回り、会場が徐々に形作られていく様子に、運営スタッフとして気持ちが昂っていったことを覚えています。運営面では、当日の進行状況や思わぬハプニングにより内心冷や汗をかく場面もありましたが、実行委員長との連携やチーム全体の柔軟な対応によって無事に進行することができました。

本フォーラムの真髄である学術発表においては、運営の苦勞が報われる瞬間が多々ありました。私が座長を務めた口頭発表セッションでは、フロアから興味深い質疑応答が相次ぎ、参加学生の探究心の深さを肌で感じました。研究内容を論理的に整理し、聴衆にわかりやすく伝える経験は学生にとって大きな挑戦となりえます。しかしそれ乗り越えた先にある自信は、将来の臨床や研究の場において確かな支えとなるように思います。また

ポスター発表では、私自身と共通点の多い研究テーマに挑む他大学の学生との出会いがありました。議論を深めていく中で、一人では到達できなかった視点や、今後の研究の指標となる多くの示唆を得ることができました。このように、同じ志を持つ医学生と切磋琢磨する横の繋がりを創り出すことこそが、本フォーラムが果たすべき重要な役割の一つだと再認識できたように感じています。

特別企画では、本フォーラムの歴史を築き、紡いでこられた先生方が、ビデオメッセージを通して学生に温かいエールを送ってくださいました。先生方のメッセージに共通していたのは、研究活動が決して単調な作業ではなく、医師としての人生をより豊かにするための鍵であるという視点です。学生時代に研究を通して得られた経験や育まれた友情、批判的に物事を捉える視点は、たとえ当時はその意義を掴みきれずとも、時を経て自らのキャリアを切り拓く際の大きな原動力となりえます。そうした先生方の実体験に基づいたお言葉は、参加した学生にとって、自らの将来を多角的に検討する上での貴重なヒントとなったように思います。その後に行われた学生によるグループディスカッションでも、周囲の学生から受けた刺激を糧に「様々なことに挑戦したい」と意気込む声が数多く聞かれ、本フォーラムが単なる発表会を超えた、医学生としての挑戦を支える場になっていることを強く実感しました。さらに、過去のフォーラムで受賞された4名の先生方をパネリストとしてお迎えし、パネルディスカッションを開催いたしました。会場の都合により駆け足での進行となりましたが、「研究の西医体であってほしい」という、先生方の本フォーラムに対する並々ならぬ情熱と期待を感じ取ることができました。

閉会後は、迫る撤収時間との戦いとなりましたが、スタッフ全員のご尽力により無事に会場を後にすることができました。緊張から解放されたあとの情報交換会での談笑、そして実行委員長から

いただいた労いのお言葉に、この上ない達成感が込み上げてきたことを覚えています。準備不足による不手際も多々ありましたが、それらから学び取れた入念なりハーサルの重要性やチームワークの大切さ、そして学術発表を通して得られた学問的な興奮は、将来医師として働く上での大きな糧になると信じています。

最後になりますが、本フォーラムの開催にあたり、多大なるご支援を賜りました公益財団法人セコム科学技術振興財団様、三医会－三重大学医学部医学科同窓会様、世話人の西村先生をはじめ、多岐にわたりご協力いただいた諸先生方、統合薬理学教室秘書の池山様、そして運営を支えてくれた全ての学生実行委員の皆様に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

●医学科4年 世古口 怜実(血液・腫瘍内科学)

最初に、今回のフォーラム開催にあたりご尽力いただいた、西村先生、俵先生、池山様、委員の皆様をはじめ、関わっていただいたすべての方々

に心から感謝申し上げます。

私は、今回初めてこのようなフォーラムに参加し、実行委員として携わらせていただきました。西日本の医学生が一堂に会して発表する場ということもあり、少し緊張していましたが、実際にフォーラムが開始すると、委員の1人として良い1日にしようという責任感のもと、至らない点が多くなりながらも、気を引き締めて割り振られた役割を果たせたと思います。フォーラム前後の会場設営・片付けは、限られた時間の中で行う必要があります。ポスターを掲示しに来てくださった他大学の先生や学生の方々には、少し待っていただかなければならなかったり、少しお手伝いしていただいたりした場面があり、当日の運営の難しさを実感しました。進行については、時間がおしてしまうことも度々ありましたが、座長や司会を務めてくださった方々を含め、委員の皆さんが臨機応

変に対応してくださったおかげで、無事にフォーラムを終えることができたと思っています。

発表者の皆さんの口頭発表やポスター発表は、とても興味深く、特にポスター発表では、医学生同士であり距離が近いため、質問の敷居が低く、積極的に質問をしながら交流することができました。口頭発表でも、発表者と質問者の質疑応答の内容のレベルが高く、より内容を理解する手助けとなっただけでなく、積極的に時には鋭い質問を投げかける学生の方の姿勢にも刺激を受けました。また、どちらの発表形式においても、他の学生の方の発表などを拝見し、発表の際の話し方や見やすいスライド・ポスターの構成など、多くのことを学ばせていただき、今後に活かしたいと思いました。そして、研究に一生懸命に取り組んでいる学生が多くいることを実感し、今後のモチベーションにもなりました。今回のフォーラムでは、他の学会とは異なり、様々な分野の研究に触れることができたため、基礎分野・臨床分野を含め、普段自分が関わらない範囲の研究の発表をきくことができたということも、特徴的な良い点であったと思います。

今回は、私自身もポスター発表をさせていただきました。三重大大学の研究内容を発表する場であるアカデミックフェアを除けば初めての発表であったため、どう話し始めればいいのか、どう話せばわかっていただけなのか、手探りの中での発表となりましたが、様々な大学の学生さんが発表をききに来てくださり、質問をしてくださったため、自然と研究を通して交流・発表をすることができました。また、他大学の先生方も発表をききにきてくださり、今後へのご助言や感想などを言ってくれたため、とても充実した時間となりました。

そして、フォーラム後の懇親会では、後片付けの都合上、少し遅れての参加とはなってしまいましたが、他大学の学生さんや先生方と、大学の話

や研究の話、また、他愛ない話など様々なお話をすることができ、一日中張りつめていた緊張の糸が緩む、楽しい時間を過ごすことができました。今回のフォーラムを通し、今まで挙げたような様々なことを学ばせていただき、大変貴重な経験をすることができました。特別企画での先生方からのビデオメッセージにもあったように、学生のうちに研究をはじめとした様々なことを経験することで視野が広がり、また、今後の糧となるといったお話を心に刻み、今後も積極的に挑戦していきたいと思いました。また、委員としての事前準備では、細かい部分まで考えなければいけないことが多く、このような大きなフォーラムを運営することの大変さを実感しました。第10回という記念すべきフォーラムに、このように携われたという貴重な経験をさせていただき、委員としても、ポスター発表者としても、初めての経験ばかりでしたが、無事に終えることができたことに安堵していると同時に、感謝の気持ちでいっぱいです。

本当にありがとうございました。

●医学科4年 谷口 優人（統合薬理学）

2025年12月20日に開催されました第10回西日本医学生学術フォーラムに、私は実行委員として参加させていただきました。研究に邁進する多くの医学生と交流を深められたことは、私にとって大変貴重な機会でした。

実行委員としての事前準備に関しては、大学の重要な試験と時期が重なっていたため、他学年の方々ほど準備に関わることはできませんでした。そのため、フォーラムの運営を主導してくださった先輩方、限られた時間の中で率先して動いてくれた同期、そして膨大な資料を作成してくれた後輩方には、心より感謝しております。

また当日も、八十島さんの指揮の下、実行委員の皆さまが臨機応変に対応してくださったおかげで、多少の時間を押す場面などはあったものの、

フォーラムを円滑に進めることができました。最後の懇親会では司会を務めさせていただき、その後、さまざまな大学の医学生や先生方と交流を深めました。お酒を片手に研究や学生生活について語り合い、知見を深めることができた時間は、私にとってかけがえのないものでした。

本フォーラムの開催にあたりご尽力いただいた西村先生、俵先生、池山様、実行委員の皆さま、ならびに関係者の皆さまに、この機会をお借りして厚く御礼申し上げます。本フォーラムのさらなる発展を心より祈念いたします。

●医学科2年 大崎 柚輝（分子病態学）

低学年のうちから規模の大きな学生学会の運営に関わることができ、大変貴重な経験となった。本学会がさまざまな団体とのタイアップによって成り立っていることを知り、私たちを支えてくださった多くの方々に深く感謝したい。

私自身、発表者としても学会に参加しており、開催の一个月ほど前は両方の準備で非常に大変であったことを記憶しているが、ほかの委員の皆様が多くの業務を担ってくださったおかげで、無事に乗り切ることができた。

委員会運営の中でも、特に印象に残っているのは懇親会の準備である。参加人数が未定の状況で、会場の規模や料理内容がある程度決定しなければならず、私にとっては初めての経験であったため、非常に難しく感じた。

懇親会の会場として選んだ店舗の名物であるブラックカレーをメニューに加えた点は、私が特にこだわった部分である。本学会は日本各地から参加者が集まる学会であり、三重県でしか味わえないものをぜひ楽しんでいただきたと考えたためである。その思いを実現することができたことは、大変うれしく思う。

学会運営という貴重な経験を得ることができ、大変有意義であった。

●医学科1年 武藤 芽衣（生化学）

中学・高校時代を通して文化祭実行委員を務めてきました。運営に関わる作業や、当日のたった一日のために何日も前から準備を重ねることが好きで、その気持ちの延長としてWJMSF2025実行委員に参加しました。しかし振り返ると、自身の力不足を痛感する場面も多く、学ぶことの多い経験であったと感じています。微力ながらサポートできればと考えていましたが、文化祭とは性質が異なり、多くの教員や関係者の方々と連携して進める本フォーラムは、これまでに経験してきたイベントとは大きく異なるもので圧倒されるばかりでした。戸惑うこともありましたが、先輩方や先生方の尽力により、無事に開催できたことに安堵しています。

事前準備では、SNS運用とプログラム作成に携わらせていただきました。SNS運用では、継続的な発信や情報を簡潔にまとめる難しさを実感しましたが、これは今後、研究活動や社会に向けて自分の考えを伝えていくうえで必要な力について考える契機となりました。プログラム作成では、情報を分かりやすく届けるための視覚的工夫に苦戦しました。結果として情報を漏れなく詰めることに注力し、デザイン面での課題が多く残りましたが、デザインの重要性を実感する貴重な経験となりました。見づらかった点もあったかと思いますが、プログラムから情報を読み取ってくださった参加者の皆様には心から感謝申し上げます。

当日は雨天にもかかわらず、多くの参加者の方々にご来場いただきました。受付に列ができている様子を見て、本フォーラムが多くの方に支えられて成り立っていることを改めて実感しました。遠方からお越しくださった皆様に、心より御礼申し上げます。

口頭発表では、同じ学生とは思えぬ洗練された発表に惹きこまれてばかりでした。簡潔なスライ

ド構成や自信をもって語る姿勢、鋭い質疑応答を目の当たりにし、これまで「聞く側」でいることが多かった自分も、数年後には発表する側に立ちたいという思いがふっと胸に湧きました。

昼食ではサラダをいただけてとても嬉しかったです。皆様も昼食についてお洒落だ、とかボリューミーだった、とか前向きな感想をおっしゃっていて、運営側として嬉しく感じました。

続くポスター発表では、カフェサークルLe Lienの方々に用意していただいた香ばしい珈琲片手に皆様のお話を伺うことができました。ポスター発表では発表者との距離が近いので、より深く議論できる点に魅力を感じます。発表を聞いて学ぶことに加え、人により発表の様子が異なるのでそれらを観察し、良いプレゼンテーションとは何かを考える時間となりました。また、発表後には必ずどなたかが質問なさるという活発な質問を見ることができて嬉しかったです。活発な質疑応答が行われる様子を間近で見ることができ、研究が相互作用の中で発展していく過程を実感しました。聴者からの質問によって新たな研究テーマが生まれる場を目撃できたことはとても刺激になりました。私自身も質問をすることができ、研究への関心がさらに高まりました。

特別企画の進行では反省点が残りましたが、仲間と協力しながら無事に終えることができました。グループディスカッションでは、話し合うテーマがあまり具体的ではなかったため、議論の幅に余裕ができましたが、話がまとまらずいくらか盛り上がり欠けた場面もあったかと思います。続くパネルディスカッションにおいては時間不足故、パネラーの皆様が議論する様子を見られず残念でしたが、非常に貴重な時間になったと思います。

懇親会では、美味しいお食事と共に、他大学の学生さんと先生方と交流する貴重な機会を得ました。疲労もあり、積極的に話しかけに行けなかったことが悔やまれます。疲労に加えて、まだ研究

にあまり時間を割けていない、結果も出していない、こんな私が話しかけに行っても良いのだろうかという躊躇いと恥ずかしさもありました。今後はより積極的に学術的な交流を深めていきたいと思っています。

一日を終え、恥ずかしながら早く休みたいということしか考えられませんでした。体力面に加え、「頭の使い方」がまだまだ未熟であることを思い知らされました。しかしそれと同時に、研究は面白い。これを痛感することができた一日でもあります。今後は研究にもより力を入れながら、今回得た学びを次の活動へとつなげていきたいと考えています。

今後も続いていくフォーラムの発展を願うとともに、その一端を担えたことを誇りに思います。お世話になった先輩方、先生方、そしてご参加くださった皆様に心より感謝申し上げます。

●医学科1年 渡邊 万央（血液・腫瘍内科学）

今回、「西日本医学生学術フォーラム2025」へ実行委員として参加させていただきました。学会への参加経験自体がほとんどない中、1年生として何ができるのか不安もありましたが、無事に閉幕を迎えられたことにほっとしています。

実行委員としての最初の仕事は、1年生全員で取り組むSNS運用でした。ゼロからのスタートで試行錯誤の連続でしたが、SNS運用としてXを用いることに決め、ハッシュタグに何を付けるのか、誰がどう投稿するのかなど、少しずつ決めながら進めていきました。二人一組でチームに分け順番に投稿する形をとっていき、少しずつ慣れてきたころに、SNS運用日程表を作成し、いつどんな内容のものを投稿するのかをまとめていき、少しでも一年のメンバーがSNS運用に負担を抑えつつ、継続的な発信ができるよう工夫をしました。この経験を通じ、チームで一つのものを運営する際の仕組みづくりの大切さを学びました。

プログラム作成が一番やりがいのある仕事で、印象に残っています。当初はプログラムがどのようなものかよくわかっておらず、どのようなレイアウトにするのか、何を掲載すればよいのかなどわからないことが多く、右往左往したため、委員長や副委員長をはじめ、委員の皆様には最後の最後まで相談に乗っていただきました。制作過程では思うように進まず、くじけそうになる瞬間もありましたが、一緒に制作していく仲間とともに形にしていくことにやりがいを感じるようになっていきました。制作していた期間としては短かったはずなのですが、ようやく最終稿が完成したときには、1ヶ月くらいかけて完成したのではないかな？くらいの達成感を得ることができ、今では忘れられない経験となりました。

当日は設営準備から始まり、タイムキーパーや特別企画の司会を担当しました。朝の会場設営は、会場中を慌ただしく動き回り、体力的にはなかなかハードな時間だったことが印象に残っています。準備が整っていく会場を見ると、気が引き締まり、運営の一員としての実感が改めて湧いてきました。プログラムが始まってからは、各発表をタイムキーパーの役割を担当しながら拝聴しました。まだまだ内容が難しい部分もありましたが、わかりやすく伝えてくださっていたので、自分の想像以上に理解できたことに嬉しく思いました。発表の際に特に印象に残ったのは、発表後の質問についてです。自分もいつかあんな風に発表して下さった方に質問を投げかけることができるくらいに理解できるようになりたいと、とても刺激を受けました。

当日で最も緊張したのは、特別企画での司会をさせていただいた場面です。時間にあまり余裕がなかった中、どのように時間配分をするのか、どのように伝えれば特別企画が有意義な時間になるのかを考えながら進行していくことは大きな挑戦でした。しかし、終えた後には、自分の中で成長

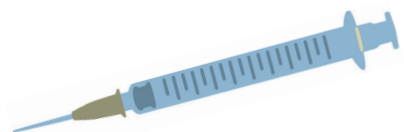
を感じ、大きな達成感を得ることができました。大勢の前で司会進行をするという貴重な機会をいただけたことに感謝しています。

フォーラム終了後の懇親会では、フォーラムの実行委員1年生同士で労い合いながら、他大学の学生や先生方とも交流をすることができました。互いにどのような研究を行っていて、どんなことに興味を持っているのかなど話が尽きず、新たにご縁をいただいた素敵な時間でした。これから研究を続けていく中で、学内だけでなく、他大学にも同じ志を持って研究に励む仲間がいると知れたことは、大きな励みとなりました。そして、これからも自分なりのペースで継続的に研究に取り組んでいきたいと強く感じるようになりました。

最後になりましたが、西村先生、俵先生、そして実行委員長の八十島さんをはじめ、実行委員の先輩方には心より感謝申し上げます。「西日本医学生学術フォーラム2025」の実行委員を務めた時間は、自分が今まで取り組んだことのないことへ挑戦させていただき、成長を実感することができた場となりました。今回の経験をこれからの学生生活や研究に活かしていきたいと思います。

今後もどのような形であれ、西日本医学生学術フォーラムに関わっていきたいと考えています。そしてこのようなフォーラムがこれから先も続いていくことを願っています。

短い期間でしたが、本当にありがとうございました。



第296回日本小児科学会東海地方会を主催して

三重大学大学院医学系研究科小児科学 平 山 雅 浩



令和8年2月22日（日）第296回日本小児科学会東海地方会を三重県医師会館にて開催いたしました。本地方会は、日本小児科学会の分科会として、三重・愛知・岐阜の東海3県における小児医療に携わる医師が一堂に会し、日常診療や研究の成果を共有するとともに、小児医療の発展を目的として定期的に開催されている学術集会です。

新型コロナウイルス感染症の影響により、近年は開催形式にも変化がありましたが、感染状況の落ち着きとともに本地方会はハイブリッド形式での開催が定着しており、今回も現地会場とWEB配信を併用した形で開催いたしました。一般演題は、優秀演題賞候補演題3題を含む計23題の発表があり、日常診療における貴重な症例報告から臨床研究まで幅広いテーマについて活発な討論が行われました。

特別講演では、三重大学大学院医学系研究科公衆衛生・産業医学・実地疫学分野教授の神谷 元先生に「感染症対策の新しいアプローチと課題」と題してご講演をいただきました。感染症対策の

最新の知見やワクチンに関する課題について、実地疫学の視点から分かりやすく解説していただき、参加者にとって大変示唆に富む内容となりました。

当日は現地参加109名、WEB参加106名、計215名と多くの先生方にご参加いただき、各演題に対して活発な質疑応答が行われるなど、大変有意義な学術集会となりました。本地方会の開催にあたり、ご講演いただいた神谷先生をはじめ、演題をご発表いただいた先生方、また運営にご協力いただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。



第76回三重県公衆衛生学会開催のご報告

公衆衛生・産業医学・実地疫学分野

寄附講座公衆衛生・感染症危機管理学講座 神谷 元・金井 瑞穂



2026年1月9日（金）に第76回三重県公衆衛生学会を開催しました。本学会は、三重県公衆衛生協会の活動の一環として当分野が事務局を担当し、年1回開催しているものです。今年は、三重県桑名保健所の芝田登美子所長に学会長をお務めいただき、津庁舎にて開催しました。参加者は行政職、医療職、看護職、医学・看護学生など様々な分野から計100名の皆様にご参加いただきました。一般演題として計11演題の発表があり、感染症、災害、母子保健、高齢者保健などの各種対策に関する発表に加え、分子生物学分野の研究発表も行われ、質疑応答で活発な議論がなされました。最も優秀な演題に対して贈られる協会長賞には、三重県桑名保健所の川邊涼夏先生による「桑名保健所における神経難病患者に対する災害に備えた支援について」が選ばれました。また、奨励賞には、三重県津保健所の本地萌香先生による「津保健所管内における外国出生結核患者の対応からみた支援のあり方」、及び、三重大学大学院医科学系研究科環境分子医学分野の小林果先生による「新型コロナウイルス感染症治療薬モルヌピラビルの宿主遺伝子変異メカニズムの解明」が選ばれました。

特別講演として浜松医科大学医学部健康社会医学講座教授の尾島俊之先生より「地域保健対策における健康危機管理」が行われました。本学会を通して、三重県の公衆衛生関係者が一堂に会し情報交換を行うことができ、非常に有意義な会となりました。今後とも三重県公衆衛生協会として地域に根差した公衆衛生活動の一層の推進に努めてまいりたいと思います。この場をお借りして、本学会の開催に多大なるご尽力をいただきました三重県桑名保健所の芝田登美子所長をはじめスタッフの皆様及び三重県医療保健部の皆様に深謝いたします。

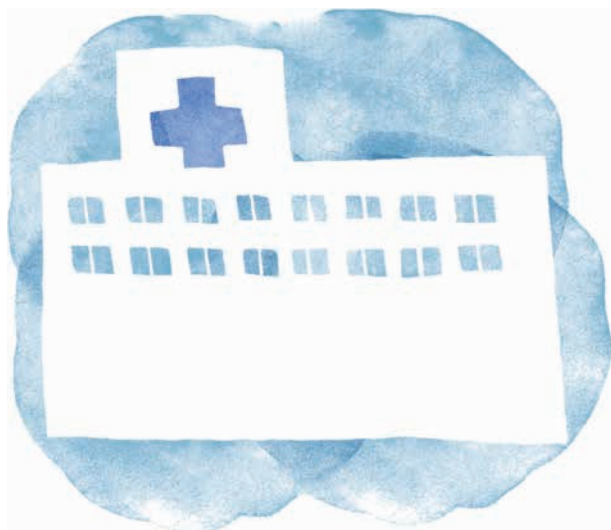
なお、本協会は1952年に設立されて以降、三重県を中心とした地域住民の健康と福祉の向上を目的として活動を継続してまいりました。当協会では、随時会員の募集を行っております。通常会員の年会費は、三重県公衆衛生学会の参加費を兼ねており、2,000円です。なお、学生（学部生・院生）は無料となっております。ご興味をお持ちの方は、ぜひご参加いただきますようよろしくお願いいたします。協会のホームページにも各種情報を掲載しておりますので、ご参照いただけますと幸いです（<https://pubhealth.med.mie-u.ac.jp/>）。



学位記授与式

令和7年12月19日（金）に医学部附属病院（研究科長室）において、学位記授与式が挙行され、平山研究科長より6名の方々に三重大学博士（医学）が授与されました。

令和8年3月25日（水）三翠ホールにおいて学位記授与式が挙行され、伊藤学長より29名の方々に三重大学博士（医学）、4名の方々に三重大学修士（医科学）、1名の方に三重大学博士（看護学）、7名の方々に三重大学修士（看護学）の称号が授与されました。



三重大学医学部の理念

Mission and Core Principles of Mie University Faculty of Medicine

確固たる使命感と倫理観をもつ医療人を育成し、豊かな創造力と研究能力を養い、人類の健康と福祉の向上につとめ、地域および国際社会に貢献する。

Mie University, School of Medicine aims to raise medical personnel with a steadfast sense of mission and ethical view, and to cultivate in it students and faculties both rich creativity and research capacity.

The school will strive for development of human health and welfare and contribute to regional and international society.

— 編集発行 —

三重大学 医学部ニュース編集委員会

〒514-8507 津市江戸橋2-174

国立大学法人 三重大学医学・病院管理部

TEL. 059 (232)1111(代表) FAX. 059(232)7498

E-mail : s-hisyokoho@mo.medic.mie-u.ac.jp
